

13.



B-0033

0258

八 海軍軍備制限ニ關スル條約（一九二三年）……………七七
九 同條約廢棄通告（一九三四年）……………八四

第五 支那ニ關スル九國條約

（一）概 説……………八五

（二）條約文

支那ニ關スル九國條約（一九二二年）……………八七

第六 不戰條約

（一）概 説……………九八

（二）條約文

一 戰爭拋棄ニ關スル條約（一九二九年）……………一〇〇

二 批准書寄託……………一〇〇

三 同條約加盟國……………一〇〇

四 同條約第一條ノ解釋ニ關スル日米間交換公文……………一一九

第七 日蘭仲裁裁判條約

（一）概 説……………一一九

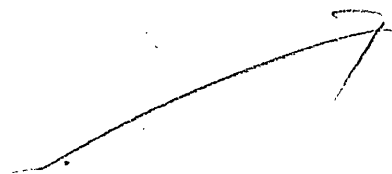
（二）條約文

一 日蘭間司法的解決、仲裁裁判及協定條約（一

九三五年）……………一二一

二 署名議定書（一九三五年）……………一二七

三 日本國及瑞西國間司法的解決條約（一九二五年）……………一三九



B-0033

026:

四 日米仲裁裁判條約（明治四一年五月五日調印）

ノ有効期間第三回延長ニ關スル協約（一九三三年）

五 日米仲裁裁判條約（明治四一年五月五日調印）

ノ有効期間第三回延長ニ關スル協約附屬交換公文（一九二三年）

公文（一九二三年）

第四 石井「ラシニング」協定

(一) 概 説、

(二) 協定文

一 支那ニ關スル日米交換公文（一九一七年）

二 同協定廢棄ニ關スル交換公文（一九二三年）

第三編 太平洋平和保障問題ニ參考タルベキ諸條約、協定、協約及同上案

第一 「ブライアン」ノ平和計畫

(一) 概 説、

(二) 同内容

一 平和條約締結方ニ關スル「ブライアン」氏ノ提議、

第二 國際聯盟規約

(一) 概 説、

(二) 條約文

一 聯盟規約（一九一九年）

第三 相互援助條約案

(一) 概 説、

(二) 條約文

一 相互援助條約案（一九二三年）

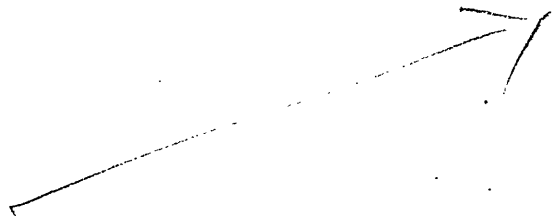
- 十二 右條約ノ更新ニ關スル議定書（一九三四年）、二二六
- 十三 「ソヴィエト」社會主義共和國聯邦「ポーランド」共和國間不侵略條約及署名議定書（一九三二年）、二二六
- 十四 右條約ノ延長ニ關スル議定書及最終議定書（一九三四年）、二二六
- 十五 佛蘭西國「ソヴィエト」聯邦間不侵略規約（一九三三年）、二二六
- 十六 佛蘭西國「ソヴィエト」聯邦間調停手續條約（一九三三年）、二二七
- 十七 伊太利國「ソヴィエト」社會主義共和國聯邦間修好、不侵略及中立規約（一九三三年）、二二七
- 十八 佛蘭西國「ソヴィエト」社會主義共和國聯邦間相互援助條約及署名議定書（一九三六年）、二二七

- 十九 「ソヴィエト」社會主義共和國聯邦「チェッコスロヴァキア」國間相互援助條約、二二七
- 二十 侵略ノ定義ニ關スル條約（八國條約）（一九三三年）、二二八
- 二十一 侵略ノ定義ニ關スル條約（五國條約）（一九三四年）、二二八
- 二十二 侵略ノ定義ニ關スル條約（「ソヴィエト」聯邦「リシアニア」國間）（一九三三年）、二二八
- 二十三 「バルテイク」諸國間ノ仲裁裁判及保障條約、二二八

B-0033

0266

十六	△米葡間 (一九二九年)	二二三
十七	△米蘭間 (一九三〇年)	二二三
十八	△米支間 (一九三〇年)	二二三



第十 太平洋沿岸諸國ニ依リ締結セラレタル諸仲裁裁判條約

(一) 概 説 二二九

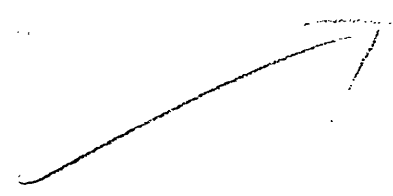
(二) 條約文

△	仲裁裁判及調停條約	
十	仲裁裁判、調停及司法的解決條約	
一	露白間 (一九〇四年)	二三一
二	蘭伊間 (一九〇九年)	二三一
三	支蘭間 (一九一五年)	二三一
四	英暹間 (一九二五年)	二三一
五	十蘭白間 (一九二七年)	二三一
六	△米佛間 (一九二八年)	二三一
七	十佛蘭間 (一九二八年)	二三一
八	△米伊間 (一九二八年)	二三一
九	蘭暹間 (一九二八年)	二三一

B-0033

0267

一九二四、	二六五
一九二五、	二六六
一九二六、	二七二
一九二七、	二七五
一九二八、	二七七
一九二九、	二八三
一九三〇、	二八九



第十二 南米不戰條約

(一) 概況、

(二) 條約文

「不侵略及調停ニ關スル南北兩米六國間不戰條約(一九三三年)」

第十三 「スタムソン」主義

(一) 概況、

(二) 「スタムソン」主義聲明文、

第十四 調停、司法的解決、仲裁裁判及保障ニ關スル諸國間諸條約一覽表(昭和五年末迄)

一八九七—一九一四、	二四五
一九一四—一九一九、	二四九
一九二〇—一九二二、	二五五
一九二三、	二六〇

第一日佛協約

(一) 概説

日露戰役終了後帝國政府ハ、該戰爭ニ依ル創痍ヲ回復シ、露國ノ復讐ヲ防止シ、戰果ヲ永久ニ確保センガ爲ニ、露國政府ト平和ヲ維持セント欲セリ。他方露國ニ於テモ、「バルカン」方面ニ於ケル獨逸トノ角逐上、單ニ歐洲ニ於ケル英國トノ和解ヲ以テ足レリトセズ、極東ニ於テモ日本ト和解シ、背後ノ保障ヲ得テ、後顧ノ憂ヲ絶ツノ必要存シタリ。

而シテ佛國ハ露國トノ同盟、英國トノ協商等ノ關係ヨリ日露ノ接近ヲ大ニ歡迎シ、日露兩國ノ接近ヲ勸告セルノミナラズ、自ラモ日本トノ接近ヲ計ルニ至レリ。

右ノ氣運ニ乘ジ一九〇七年ニ於テ日佛兩國間ニ政治協約ノ成立ヲ見、佛國ハ日露戰爭ノ結果ヲ承認シ日本ハ佛領印度支那ニ於ケル佛國領土權ノ尊重ヲ約スルニ至レリ。

本協商及後述ノ日露協商ハ東亞就中清國ニ於ケル勢力範圍及特殊利益地域ヲ確保シ此等三國間ノ紛争原因ヲ排除シタルモノニシテ、當時ニ於テハ夫自身秘メテ重要ナル意義ヲ有シタリ。而シテ兩協商ハ從來東亞ニ於テ相抗争シタル露佛同盟及日英同盟ヲ融合セシメ其聯絡ニ導キタル點ニ於テ、ヨリ重要ナル歴史的意義ヲ有ス。斯クテ日本ノ地位カ特ニ重大ナル意義ヲ持チ又東洋カ均勢上一層重キヲ加ヘ、太平洋カ世界地圖ニ地步ヲ占メ、又亞細亞ニ於テ實現セラレタル取極及結合カ其結果ヲ歐洲及合衆國其ノ他地球ノ到ル所ニ感ゼシムル時ヲ到來セシメタリ。然レトモ其ノ後ノ國際情勢ノ推移ハ本協約ノ現代的意義ヲ輕微ナラシメ居レリ。

(二) 條 約 文

一 明治四十年協約

明治四〇年（一九〇七年）六月一〇日「パリ」ニ於テ署名

明治四〇年（一九〇七年）六月一七日官報掲載

日本國皇帝陛下ノ政府及佛蘭西共和國政府ハ兩國ノ間ニ存在スル友好ノ關係ヲ鞏固ニシ且將來誤解ノ原因ヲ兩國ノ關係ヨリ全然除去セムコトヲ希望シ之カ爲左ノ協約ヲ締結スルコトニ決定セリ

日本國政府及佛蘭西國政府ハ清國ノ獨立及領土保全並清國ニ於テ各國ノ商業、臣民又ハ人民ニ對スル均等待遇ノ主義ヲ尊重スルコトニ同意ナルニ依リ且兩締約國カ主權、保護權又ハ占有權ヲ有スル領域ニ近邇セル清帝國ノ諸地方ニ於テ秩序及平和事態ノ確保セララルコトヲ特ニ願念スルニ依リ兩締約國ノ亞細亞大陸ニ於ケル相互ノ地位並領土權ヲ保持セムカ爲前記諸地方ニ於ケル平和及安寧ヲ確保スルノ目的ニ對シ互ニ相支持スルコトヲ約ス

右證據トシテ下名、佛蘭西國駐劄帝國特命全權大使栗野慎一郎及外務大臣元老院議員「ステファン、ビション」ハ各其ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ之ニ記名調印スルモノナリ

一千九百七年六月十日巴里ニ於テ本書ヲ作ル

栗野慎一郎（記名調印）
「エス、ビション」（記名調印）

ニ佛領印度支那ニ關スル宣言書

明治四〇年（一九〇七年）六月一〇日「パリ」ニ於テ署名

明治四〇年（一九〇七年）六月一七日官報掲載

日本國政府及佛蘭西國政府ハ日本國ト佛領印度支那トノ關係ニ付通商條約ヲ締結セムカ爲商議ヲ開始スルコトヲ他日ニ譲リ茲ニ先ツ協定スル所左ノ如シ

日本國官吏及臣民ハ佛領印度支那ニ於テ身體ト財産保護トニ關スル一切ノ事項ニ付最惠國待遇ヲ享クヘク又佛領印度支那ノ臣民及保護民ハ日本帝國ニ於テ之ト同一ノ待遇ヲ享クヘシ但シ本協定ハ一千八百九十六年八月四日日本國ト佛蘭西國トノ間ニ締結セラレタル通商航海條約ノ期限終了ト共ニ其ノ效力ヲ失フ

一千九百七年六月十日巴里ニ於テ

栗野慎一郎（記名調印）
「エス、ビション」（記名調印）

第二 高平「ルート」協定

(一) 概説

日露戦争迄親日的ナリシ米國ノ輿論ハ戰後漸ク反日的トナリ、移民問題、日本人學童排斥問題等ハ兩國國交ニ暗影ヲ投ズルニ至レリ。獨逸ハ極東ニ於ケル日英、日露、日佛條約ニ依ル獨逸包圍策ニ對抗センガ爲、獨、清、米三國同盟ヲ作ラントシ、日米間ノ離間ニ努メタリ。斯カル情勢ナリシニ不拘、帝國政府トシテハ對露清政策上及通商貿易上米國ト相争フコトヲ欲セズ終始和協ニ努メタリ。斯クテ所謂紳士協約ノ締結、米國艦隊ノ横濱訪問等ヨリ輿論好轉セル機ヲ利用シテ日米協定ヲ締結スルニ至レリ。斯クシテ成立セルモノガ高平「ルート」協定ナリ。而シテ該協定ノ内容上注意スベキハ清國ニ關スル點ナリ。始メ日本ハ清國ニ於ケル機會均等ヲ提議セルニ米國ハ清國ノ獨立及領土保全ノ文字ヲ加ヘ更ニ「アドミニストラティブ、エンテイティブ」ノ語ヲ加ヘントシタル所、日本側ニ於テハ該提案

ヲ滿洲ニ於ケル租借地、滿鐵附屬地行政權ニ對スル考慮上削除シタル上、該協定ノ成立ヲ見ルニ至レリ。本協定ノ成立ニ依リ、日露戰役以來太平洋上ニ蟠リタル暗雲ヲ一掃シ、日英同盟、日佛協商及日露協商ト相俟チテ極東ノ平和維持ニ貢獻シタリ。然レドモ石井「ランシング」協定ノ成立及失效竝ニ華府會議ニ於ケル諸條約ノ成立以後ハ高平「ルート」協定ノ政治的意義ハ消滅シタリ。

(二)協定文

一、太平洋方面ニ關スル交換公文

明治四一年(一九〇八年)十一月三〇日「ワシントン」ニ於テ
 明治四一年(一九〇八年)一月二日官報掲載

帝國大使ヨリ米國國務卿宛往翰

以喜東致啓上候陳者先頃來閣下ト本使トノ間ニ數次ノ會見ヲ遂ケ意見ヲ交換致候結果日本國及合衆國ハ太平洋方面ニ於テ本國ヨリ隔在スル重要ナル島嶼ノ所領ヲ保有スルモノニ有之兩國政府ハ同方面ニ於テ共通ノ目的、政策及旨意ヲ有スルコト明瞭ト相成候

帝國政府ハ該目的、政策及旨意ヲ眞率ニ表明スルハ昔ニ日本國ト合衆國トノ間ニ久シク存在シタル友好善隣ノ關係ヲ鞏固ナラシムルニ至ルヘキノミナラス又以テ大局ノ平和ヲ維持スルニ資スル所大ナル

ヘキコトヲ信シ該共通ノ目的、政策及旨意ト認ムル所ノ左記總領ト閣下ニ提出スヘキ旨本使ニ訓示有之候

一、太平洋ニ於ケル兩國商業ノ自由平穩ナル發達ヲ獎勵スルハ兩國政府ノ希望タリ

二、兩國政府ノ政策ハ何等侵略的傾向ニ制セラルルコトナク前記方面ニ於ケル現状維持及清國ニ於ケル商工業ノ機會均等主義ノ維護ヲ目的トス

三、從テ兩國政府ハ相互ニ前記方面ニ於テ他ノ一方ノ有スル所領ヲ尊重スルノ強固ナル決意ヲ有ス

四、兩國政府ハ又其ノ權内ニ屬スル一切ノ平和手段ニ依リ清國ノ獨立及領土保全竝同帝國ニ於ケル列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ヲ支持シ以テ清國ニ於ケル列國ノ共通利益ヲ保存スルノ決意ヲ有ス

五、前述ノ現状維持又ハ機會均等主義ヲ侵迫スル事件發生スルトキ

ハ兩國政府ハ其ノ有益ト認ムル措置ニ關シ協商ヲ遂ケムカ爲互ニ
意見ヲ交換スヘシ

若シ前記綱領ニシテ合衆國政府ノ見解ト一致スルニ於テハ之ニ對ス
ル閣下ノ確認ヲ得度候

本使ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候

敬具

一千九百八年十一月三十日

在華盛頓日本帝國大使館ニ於テ

日本帝國特命全權大使男爵 高平 小五郎

北米合衆國國務卿 「エリヒニー、ルイト」閣下

米國國務卿ヨリ帝國大使宛來翰

以書東致啓上候陳者先頃來本官ニ於テ數次閣下ト會見シ意見ヲ交換

セル結果兩國政府ノ太平洋方面ニ於ケル政策ニ關シテ雙方ノ認識セ
ル所ヲ開列セラレタル本日附貴東正ニ領收致候

右雙方認識ノ表明ハ能ク兩國ノ親善ナル關係ニ適應シ且兩國政府カ
極東ニ關シ從來累次聲明セル協同ノ政策ヲ約述互認スルノ機會ヲ與
フルモノニシテ合衆國政府ノ歡迎スル所ニ有之候

茲ニ合衆國政府ヲ代表シ閣下ニ向テ左記兩國政府ノ宣言ヲ確認スル
ヲ得ルハ本官ノ欣幸トスル所ニ有之候

- 一、太平洋ニ於ケル兩國商業ノ自由平穩ナル發達ヲ獎勵スルハ兩國
政府ノ希望タリ
- 二、兩國政府ノ政策ハ何等侵略的傾向ニ制セラルコトナク前記方
面ニ於ケル現狀維持及清國ニ於ケル商工業ノ機會均等主義ノ擁護
ヲ目的トス
- 三、從テ兩國政府ハ相互ニ前記方面ニ於テ他ノ一方ノ有スル所領ヲ

B-0033

0275

尊重スルノ強固ナル決意ヲ有ス
 四、兩國政府ハ又其ノ權内ニ屬スル一切ノ平和手段ニ依リ清國ノ獨立及領土保全並同帝國ニ於ケル列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ヲ支持シ以テ清國ニ於ケル列國ノ共通利益ヲ保存スルノ決意ヲ有ス
 五、前述ノ現状維持又ハ機會均等主義ヲ侵迫スル事件發生スルトキハ兩國政府ハ其ノ有益ト認ムル措置ニ關シ協商ヲ遂ケムカ爲互ニ意見ヲ交換スヘシ

本官ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候

一千九百八年十一月三十日

敬 具

在華盛頓國務省ニ於テ

北米合衆國國務卿 「エリヒュー、ルート」

日本帝國特命全權大使男爵高 平 小五郎 閣 下

第三 「ヴェルサイユ」條約及關係約定

(一) 概 説

世界大戰ノ結果締結セラレタル「ヴェルサイユ」條約第一一九條ニ依リ、獨逸ハ其ノ海外屬地ニ關スル一切ノ權利及權原ヲ主タル同盟及聯合國ノ爲ニ拋棄スルコトナレリ。而シテ主タル同盟及聯合國ハ國際協力ノ促進、各國間ノ平和安寧ノ完成ノ爲ニ國際聯盟ヲ結成シ、「ヴェルサイユ」條約第一編ニ其ノ基本規程タル國際聯盟規約ヲ定メタリ。

右聯盟規約中第二二條ニ於テ獨逸ノ舊海外領土ニ付委任統治ノ制度ヲ規定シ、原聯盟國タリシ帝國ハ受任者ノ一トシテ赤道以北ノ南洋群島ノ統治ニ當ルコトナレリ。然シテ米國ニ於テモ、此ノ結果ヲ認ムル條約ヲ帝國ト締結シタリ。尙「サモア」諸島ハ新西蘭ノ、「ナウル」ハ英帝國ノ、右兩島以外ノ赤道以南諸島ハ濠太利聯邦ノ委任統治ニ服スルコトナリタリ。

舊獨逸領委任統治ノ制度ハ右ノ如ク國際聯盟機構内ニ取入レラレ、從ツテ委任國ハ委任統治ニ關シ聯盟ノ監督ヲ受クルコトナリタリ。然レドモ太平洋ニ就テ最重要ナル利害ヲ有セル米露ノ二國ハ聯盟外ニ存シ太平洋諸島ノ委任統治ニ關スル限り、聯盟ニ依ル監督ハ無力タルヲ免レザリキ。故ニ米露、就中米國ヲ含ム太平洋ノ平和保障條約ハ早晚締結セラレベキ運命ニアリタリ。然シテ右要求ハ四國條約トナリテ實現セラレタリ。

昭和十年（一九三五年）三月帝國ノ國際聯盟脫退ガ實現スルニ及ビ、南洋群島ニ對スル帝國ノ地位ニ就キ兎角ノ論議ヲ生ジタリ。然レドモ一九一九年一月ノ所謂十人會議ノ「スムツツ」決議ニ依ルモ、又「ヴェルサイユ」條約第一一九條ノ規定ニ依ルモB式及C式ノ委任統治地域タル獨逸ノ舊海外屬地ハ獨逸國ヨリ主タル同盟及聯合國ニ讓渡セラレタルモノニシテ國際聯盟ニ讓渡セラレタルモノニ非ルコト明白ナルヲ以テ、委任國トシテノ帝國ノ地位ニハ何等ノ變更ヲ來スモノニ非ルコト今日ニ於テハ異論ナキ所ナリ。

(二) 條約文

一 同盟及聯合國ト獨逸國トノ平和條約並議定書

大正八年六月二十八日「ヴェルサイユ」ニ於テ署名

同 年十一月 七日 批 准 (日本)

同 年十二月二十六日批准通報 (日本)

大正九年一月 十日第一回批准書寄託調書作成

同 年一月 十日 公 布 (日本)

同盟及聯合國ト獨逸國トノ平和條約

第二十二條

今次ノ戰爭ノ結果從前支配シタル國ノ統治ヲ離レタル殖民地及領土ニシテ近代世界ノ激甚ナル生存競争状態ノ下ニ未タ自立シ得サル人民ノ居住スルモノニ對シテハ該人民ノ福祉及發達ヲ計ルハ文明ノ神聖ナル使命ナルコト及其ノ使命遂行ノ保障ハ本規約中ニ之ヲ包容スルコトノ主義ヲ適用ス

此ノ主義ヲ實現スル最善ノ方法ハ該人民ニ對スル後見ノ任務ヲ先進國ニシテ資源、經驗又ハ地理的位置ニ因リ最此ノ責任ヲ引受クルニ適シ且之ヲ受諾スルモノニ委任シ之ヲシテ聯盟ニ代リ受任國トシテ右後見ノ任務ヲ行ハシムルニ在リ

委任ノ性質ニ付テハ人民發達ノ程度、領土ノ地理的地位、經濟狀態其ノ他類似ノ事情ニ從ヒ差異ヲ設クルコトヲ要ス

從前土耳其帝國ニ屬シタル或部族ハ獨立國トシテ假承認ヲ受ケ得ル發達ノ程度ニ達シタリ尤モ其ノ自立シ得ル時期ニ至ル迄施政上受任國ノ助言及援助ヲ受クヘキモノトス前記受任國ノ選定ニ付テハ主トシテ當該部族ノ希望ヲ考慮スルコトヲ要ス

他ノ人民殊ニ中央アフリカノ人民ハ受任國ニ於テ其ノ地域ノ施政ノ責ニ任スヘキ程度ニ在リ尤モ受任國ハ公ノ秩序及善良ノ風俗ニ反セザル限り良心及信教ノ自由ヲ許與シ、奴隸ノ賣買又ハ武器若ハ火酒類ノ取引ノ如キ弊習ヲ禁止シ竝築城又ハ陸海軍根據地ノ建設及警察

又ハ地域防衛以外ノ爲ニスル土民ノ軍事教育ヲ禁遏スベキコトヲ保障シ且他ノ聯盟國ノ通商貿易ニ對シ均等ノ機會ヲ確保スルコトヲ要ス

西南アフリカ及或南太平洋諸島ノ如キ地域ハ人口ノ稀薄、面積ノ狭小、文明ノ中心ヨリ遠キコト又ハ受任國領土ト隣接セルコト其ノ他ノ事情ニ依リ受任國領土ノ構成部分トシテ其ノ國法ノ下ニ施政ヲ行フヲ以テ最善トス但シ受任國ハ土著人民ノ利益ノ爲前記ノ保證ヲ與フルコトヲ要ス

各委任ノ場合ニ於テ受任國ハ其ノ委任地域ニ關スル年報ヲ聯盟理事會ニ提出スヘシ

受任國ノ行フ權限、監理又ハ施政ノ程度ニ關シ豫メ聯盟機關ニ合意ナキトキハ聯盟理事會ハ各場合ニ付之ヲ明定スヘシ

受任國ノ年報ヲ審査セシメ且委任ノ實行ニ關スル一切ノ事項ニ付聯盟理事會ニ意見ヲ具申セシムル爲常設委員會ヲ設置スヘシ

ヘシ
 (ハ) 疾病ノ豫防及撲滅ノ爲國際利害關係事項ニ付措置ヲ執ルニ力ム
 ヘシ

第二十三條

聯盟國ハ現行又ハ將來協定セラレベキ國際條約ノ規定ニ遵由シ

- (イ) 自國內ニ於テ及其ノ通商産業關係ノ及フ一切ノ國ニ於テ男女及兒童ノ爲ニ公平ニシテ人道的ナル勞働條件ヲ確保スルニ力メ且之カ爲必要ナル國際機關ヲ設立維持スヘシ
- (ロ) 自國ノ監理ニ屬スル地域内ノ土著住民ニ對シ公正ナル待遇ヲ確保スルコトヲ約ス
- (ハ) 婦人兒童ノ賣買竝阿片其ノ他ノ有害藥物ノ取引ニ關スル取極ノ實行ニ付一般監視ヲ聯盟ニ委託スヘシ
- (ニ) 武器及彈藥ノ取引ヲ共通ノ利益上取締ルノ必要アル諸國トノ間ニ於ケル該取引ノ一般監視ヲ聯盟ニ委託スヘシ
- (ホ) 交通及通過ノ自由竝一切ノ聯盟國ノ通商ニ對スル衡平ナル待遇ヲ確保スル爲方法ヲ講スヘシ右ニ關シテハ千九百十四年乃至千九百十八年ノ戰役中荒廢ニ歸シタル地方ノ特殊ノ事情ヲ考慮ス

第四編

獨逸國外ニ於ケル獨逸國ノ權利及利益

第一百十八條

獨逸國ハ本條約ニ定メタル其ノ歐羅巴ニ於ケル國境外ノ地域ニ於テ自國又ハ其ノ同盟國ノ領土内ニ又ハ該領土ニ關シテ有スル一切ノ權利、權原及特權並發生事由ノ如何ヲ問ハス同盟及聯合國ニ對シテ有スル一切ノ權利、權原及特權ヲ拋棄ス

獨逸國ハ前項ノ規定實行ノ爲主タル同盟及聯合國ガ必要ナル場合ニハ第三國ト協議シテ現在又ハ將來ニ於テ孰ルコトアルヘキ措置ヲ承認シ且之ニ遵由スルコトヲ茲ニ約ス

獨逸國ハ殊ニ特定事項ニ關スル左ノ各條ヲ受諾スルコトヲ聲明ス

第一款

獨逸國殖民地

第一百七九條

獨逸國ハ其ノ海外屬地ニ關スル一切ノ權利及權原ヲ主タル同盟及聯合國ノ爲ニ拋棄ス

第二百十條

前記地域ニ於ケル一切ノ動産及不動産ニシテ獨逸帝國又ハ獨逸聯邦ニ屬スルモノハ總テ第九編（財政條項）第二百五十七條ニ規定スル條件ニ從ヒ該地域ニ對シ權限ヲ行使スル政府ニ歸屬スヘシ右財産ノ性質ニ關スル爭議ニ付テハ該地方ノ裁判所ノ判決ヲ以テ確定ト爲スヘシ

第二百十一條

第十編（經濟條項）第一款及第四款ノ規定ハ前記地域ニ對スル施政ノ形式如何ニ拘ラス該地域ニ付之ヲ適用スヘシ

第二百十二條

前記地域ニ對シ權限ヲ行使スル政府ハ該地域内ニ在ル獨逸國民ノ送還ニ關シ及歐羅巴系獨逸國臣民ノ該地域ニ於ケル居住、財産保有、

營業又ハ職業ヲ許可シ又ハ禁止スルノ條件ニ關シ其ノ適當ト認ムル處置ヲ執ルコトヲ得

第二百二十三條

第九編（財政條項）第二百六十條ノ規定ハ獨逸國海外屬地ニ於ケル公共工事ノ實行又ハ經營ノ爲獨逸國民ト締結シタル一切ノ取極及該取極ニ基キ獨逸國民ニ許與シ又ハ之ト締結シタル下請負又ハ契約ニ之ヲ適用スヘシ

第二百二十七條

舊獨逸國海外屬地ノ土人ハ該地域ニ對シ權限ヲ行使スル政府ノ外交上ノ保護ヲ受クルノ權利ヲ有スヘシ

第二百五十七條

獨逸國ノ舊領土（殖民地、保護領又ハ屬領地ヲ含ム）ニシテ本條約第一編（國際聯盟規約）第二十二條ニ依リ受任國ニ於テ施政ヲ行フニ付テハ該領土又ハ受任國ハ共ニ獨逸帝國又ハ其ノ各邦ノ公債ノ償還ノ

部分ヲモ負擔スルコトナカルヘシ

前記領土内ニ在ル獨逸帝國又ハ獨逸各邦ニ屬スル一切ノ財産及所有物ハ受任國之ヲ該領土ト共ニ受任國タル資格ニ於テ讓受クヘク且其ノ對價トシテ獨逸國又ハ獨逸各邦ノ政府ニ對シ何等支拂ヲ爲シ又ハ貸方ニ計上スルコトナカルヘシ

本條ノ獨逸帝國及獨逸各邦ノ財産及所有物ニハ帝室、帝國又ハ各邦ノ一切ノ財産及前獨逸皇帝其ノ他ノ王族ノ私財産ノ全部ヲ包含ス

第二百六十條

本條約ノ他ノ規定ニ依リ獨逸國カ自國又ハ其ノ國民ニ屬スル權利ヲ拋棄スル場合ヲ除クノ外賠償委員會ハ本條約實施後一年以内ニ露西亞國、支那國、土耳其國、埃地利國、洪牙利國及勃爾牙利國ニ於テ此等諸國ノ屬領地内ニ於テ之ハ本條約ニ依リ受任國カ施政ヲ行フヘキ若ハ他國ニ讓渡セララルヘキ獨逸國若ハ其ノ同盟國ノ舊領土内ニ於テ經營セララル公共事業又ハ特許事業ニ關スル獨逸國民ノ權利及利

益ヲ獨逸國政府カ取得スルコトヲ得ヘク且該政府ニ對シ其ノ取得シタル一切ノ前記ノ權利又ハ利益及同政府自身ノ有スル同種ノ權利及利益ヲ右要求ノ日ヨリ六月以內ニ賠償委員會ニ讓渡スルコトヲ求ムルコトヲ得

獨逸國ハ右ニ依リ權利及利益ヲ失ヒタル其ノ國民ニ對シ賠償ノ責ヲ負フヘシ賠償委員會ハ讓渡セラレタル權利及利益ノ價格トシテ其ノ評定シタル金額ヲ獨逸國ノ賠償負擔額ニ對シ其ノ貸方ニ計上スヘシ前記一切ノ權利及利益ハ其ノ既ニ付與セラレタルト條件附ナルト未タ行使セラレサルトヲ問ハス本條約實施後六月以內ニ獨逸國政府賠償委員會ニ之ヲ通知スヘク其ノ通知ニ洩レタル權利及利益ハ獨逸國ハ自國トシテ其ノ國民ニ代リテ同盟及聯合國ノ爲ニ總テ之ヲ拋棄スヘシ

第十編

經濟條項

第一款

通商關係

第一章

稅關規則、税金及制限

第二百六十七條

貨物ノ輸入、輸出又ハ通過ニ關シ獨逸國カ同盟國若ハ聯合國又ハ其ノ他ノ外國ニ許與スル一切ノ恩典、免除又ハ特權ハ即時且無條件ニテ又請求ヲ俟タス且無償ニテ一切ノ同盟及聯合國ニ及ホサルヘシ

第四章

同盟及聯合國ノ國民ノ待遇

第二百七十八條

獨逸國ハ同盟及聯合國ノ法令ニ依リ及其ノ同盟及聯合國ノ當該官憲カ歸化法又ハ條約ノ規定ニ從ヒテ爲シタル裁決ニ依リ獨逸國民ノ取得シ又ハ取得スルコトアルヘキ新國籍ヲ承認シ且其ノ國民ハ之ヲ新

國籍取得ノ結果一切ノ關係ニ於テ其ノ原國籍國ニ對スル忠誠ノ義務ヲ離脱シタルモノト認ムヘキコトヲ約ス

外務省告示第十六號

同盟及聯合國ト稱進國トノ平和條約第二十二條及第百十九號ニ關シ大正八年五月七日巴里講和會議ハ左記第一ノ決議ヲ爲シ大正九年十月十七日國際聯盟理事會ハ「ジュネーヴ」ニ於テ該講和會議及前記條約第二十二條第八項ニ基キ左記第二ノ決定ヲ爲シ帝國政府ハ今般右國際聯盟理事會決議ノ認證牒本ヲ接受シタリ
右國際聯盟理事會ノ決定ヲ爲スニ當リ帝國代表者ハ左記第三ノ宣言ヲ爲シ之ヲ記錄ニ留メタリ

大正十年四月二十九日

外務大臣 伯爵 内 田 康 哉

第一 巴里講和會議決議

左ノ通決議ス

一、「トローランド」及「カメルーン」

此等ノ地域ノ將來ニ關シテハ佛蘭西國及大不列顛國ヨリ國際聯盟

B-0033

0283

ニ對シ共同建議ヲ爲スヘシ
 獨逸領京阿弗利加
 大不列顛國ノ委任統治トス
 獨逸領西南阿弗利加
 南阿弗利加聯邦ノ委任統治トス
 獨逸領「サモア」諸島
 新西蘭ノ委任統治トス
 太平洋中赤道以南ノ獨逸領諸島但シ「サモア」諸島及「ナウル」ヲ除ク
 濠太利聯邦ノ委任統治トス
 「ナウル」
 英帝國ノ委任統治トス
 赤道以北ノ獨逸領諸島
 日本國ノ委任統治トス

二、千九百十五年四月二十六日ノ倫敦條約第十三條ノ適用ヲ審議スル爲英帝國佛蘭西國及伊太利國ノ各一名ノ代表者ヨリ成ル聯合國委員會ヲ組織スルコト
 三、上記決議ハ之ヲ公表スルコト
 第二 赤道以北太平洋舊獨逸領諸島委任統治條項
 國際聯盟理事會ハ
 千九百十九年六月二十八日「ヴェルサイユ」ニ於テ署名シタル獨逸國トノ平和條約第九十九條ニ依リ獨逸國ハ太平洋中赤道以北ニ位スル諸群島ヲ包含スル其ノ海外屬地ニ關スル一切ノ權利ヲ主タル同盟及聯合國ノ爲ニ拋棄シタルニ因リ
 主タル同盟及聯合國ハ同平和條約第一編（國際聯盟規約）第二十二條ニ準據シ前記諸島ノ施政ヲ行フノ委任ヲ日本國皇帝陛下ニ付與スルコトニ一致シ且右委任統治條項ヲ左ノ通定ムヘキコトヲ提議シタルニ因リ

日本國皇帝陛下ハ前記諸島ニ關スル委任ヲ受諾スルニ決シ且左記ノ規定ニ準據シ國際聯盟ニ代リ該委任ヲ實行スルコトヲ約シタルニ因リ

前記第二十二條第八項ハ受任國ノ行フ權限、監理又ハ施政ノ程度ニ關シ豫メ聯盟國間ニ合意ナキトキハ聯盟理事會ハ之ヲ明定スヘキコトヲ規定スルニ因リ

前記委任ヲ確認シ其ノ條項ヲ左ノ如ク定ム

第一條

日本國皇帝陛下(以下受任國ト稱ス)ニ委任ヲ付與シタル諸島ハ太平洋洋中赤道以北ニ位スル舊獨逸領諸島ノ全部ヲ含ム

第二條

受任國ハ本委任統治條項ニ依ル地域ニ對シ日本帝國ノ構成部分トシテ施政及立法ノ全權ヲ有スヘク且情況ニ應シ必要ナル地方的變更ヲ加ヘテ本地域ニ日本帝國ノ法規ヲ適用スルコトヲ得

受任國ハ本委任統治條項ニ依ル地域ノ住民ノ物質的及精神的幸福並社會的進歩ヲ極力増進スヘシ

第三條

受任國ハ奴隸賣買ヲ禁止スルコト並須要ナル公共的工事及役務ノ爲ニスル場合ヲ除クノ外強制勞働ヲ許容セサルコトヲ督視スヘシ右例外ノ場合ニ於テモ相當ノ報償ヲ支拂フコトヲ要ス

受任國ハ又千九百十九年九月十日署名ノ武器取引ノ取締ニ關スル條約又ハ之ヲ修正スル條約ニ規定スル所ト同様ナル原則ニ準據シ武器彈藥ノ取引ヲ取締ルコトヲ督視スヘシ

第四條

土著民ノ軍事教育ハ地域内警察及本地域ノ地方的防衛ノ爲ニスル場合ヲ除クノ外之ヲ禁止スヘシ又本地域内ニ陸海軍根據地又ハ築城ヲ建設スルコトヲ得ス

第五條

公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ノ維持ニ關スル地方的法規ニ反セサル限り
受任國ハ本地域内ニ於テ良心ノ自由並各種禮拜ノ自由執行ヲ確保シ
又聯盟國ノ國民タル一切ノ宣教師カ其ノ職務ヲ行フ爲本地域内ニ到
リ、旅行シ又ハ居住スルコトヲ許スヘシ

第六條

受任國ハ國際聯盟理事會ヲ満足セシムヘキ年報ヲ同理事會ニ提出ス
ヘシ該年報中ニハ本地域ニ關スル詳細ナル情報ヲ記載シ且第二條乃
至第五條ニ依リ負擔シタル義務ヲ實行スル爲ニ執リタル諸般ノ措置
ヲ表示スヘシ

第七條

本委任統治條項ノ規定ヲ變更スルニハ國際聯盟理事會ノ同意ヲ要ス
受任國ハ本委任統治條項ノ規定ノ解釋又ハ適用ニ關シ受任國ト他ノ
聯盟國トノ間ニ紛争ヲ生シタル場合ニ於テ其ノ紛争カ交渉ニ依リ解

決スルコト能ハサルトキハ之ヲ國際聯盟規約第十四條ニ規定スル常
設國際司法裁判所ニ付託スヘキコトニ同意ス

本宣言ハ國際聯盟ノ記録ニ之ヲ寄託スヘク國際聯盟事務總長ハ本書
ノ認證原本ヲ稍逸トノ平和條約ノ署名國ニ送付スヘシ

千九百二十年十二月十七日「ジュネヴァ」ニ於テ作成ス

第三 帝國政府宣言

帝國政府ハ國際聯盟ノ根本精神上將又聯盟規約ノ解釋上通商及貿易
上ノ機會均等ノ保障ニ關スル一項ヲC式委任統治條項中ニ挿入スヘ
シトノ帝國政府從來ノ主張カ正當ナルコトノ確信ヲ有ス然レトモ和
衷共同ノ精神ヨリ且本問題ヲ未解決ノ體ニ存置セシムルヲ欲セサル
ニ依リ帝國政府ハ現在ノ形式ニ於テ委任統治條項ヲ制定スルニ同意
スルコトニ決シタリ

尤モ右ノ決定ハ委任統治地域ニ於テ帝國臣民カ差別的且不利益ナル
待遇ヲ受クルコトヲ帝國政府ニ於テ容認シタルモノト看做スヲ得ス

又帝國政府ハ帝國臣民カ從來是等ノ地域ニ於テ享有シタル權利及利益ノ充分ニ尊重セラレヘントノ主張ヲ右決定ニ依リテ拋棄シタルモノニ非ス

三、「ヤップ」島及他ノ赤道以北ノ太平洋委任統治諸島ニ關スル日米條約

大正二一年(一九二二年)二月一日「ワシントン」ニ於テ署名
 大正一一年(一九二二年)六月二三日批
 大正一一年(一九二二年)七月一三日「ワシントン」ニ於テ批准書交換
 大正一一年(一九二二年)七月一三日公
 大正一一年(一九二二年)七月一三日實
 布 施

日本國及亞米利加合衆國ハ

千九百十九年六月二十八日署名セラレタル「ヴェルサイユ」條約第百十九條ニ依リ獨逸國カ同條約ニ謂フ主タル同盟及聯合國タル諸國即チ亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國、伊太利國及日本國ノ爲ニ其ノ海外屬地ニ關スル一切ノ權利及權原ヲ拋棄シタルコトヲ思ヒ前記「ヴェルサイユ」條約第百十九條ニ依リ合衆國ニ歸屬スル利益ハ合衆國及獨逸國間ノ友好關係ヲ恢復セムカ爲千九百二十一年八月二十五日署名セラレタル兩國間ノ條約ニ依リ確認セラレタルコトヲ思ヒ

B-0033

0287

前記四國即チ英帝國、佛蘭西國、伊太利國及日本國ハ「ヴェルサイユ」條約ニ依リ太平洋中赤道以北ニ位スル舊獨逸領諸群島ニ付左記ノ條項ニ準據シテ其ノ施政ヲ行フノ委任ヲ日本國皇帝陛下ニ付與スルコトニ一致シタルコトヲ思ヒ

第一條 日本國皇帝陛下（以下受任國ト稱ス）ニ委任ヲ付與シタル諸島ハ太平洋中赤道以北ニ位スル舊獨逸領諸島ノ全部ヲ含ム

第二條 受任國ハ本委任統治條項ニ依ル地域ニ對シ日本帝國ノ構成部分トシテ施政及立法ノ全權ヲ有スヘク且情況ニ應シ必要ナル地方的變更ヲ加ヘテ本地域ニ日本帝國ノ法規ヲ適用スルコトヲ得
受任國ハ本委任統治條項ニ依ル地域ノ住民ノ物質的及精神的幸福並社會的進歩ヲ極力増進スヘシ

第三條 受任國ハ奴隸賣買ヲ禁止スルコト並須要ナル公共的工事及役務ノ爲ニスル場合ヲ除クノ外強制労働ヲ許容セサルコトヲ督視スヘシ右例外ノ場合ニ於テモ相當ノ報償ヲ支拂フコトヲ要ス

受任國ハ又千九百十九年九月十日署名ノ武器取引ノ取締ニ關スル條約又ハ之ヲ修正スル條約ニ規定スル所ト同様ナル原則ニ準據シ武器彈藥ノ取引ヲ取締ルコトヲ督視スヘシ

第四條 土著民ノ軍事教育ハ地域内警察及本地域ノ地方的防衛ノ爲ニスル場合ヲ除クノ外之ヲ禁止スヘシ及本地域内ニ陸海軍根據地又ハ築城ヲ建設スルコトヲ得ス

第五條 公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ノ維持ニ關スル地方的法規ニ反セサル限り受任國ハ本地域内ニ於テ良心ノ自由並各種禮拜ノ自由執行ヲ確保シ又聯盟國ノ國民タル一切ノ宣教師カ其ノ職務ヲ行フ爲本地域内ニ到リ、旅行シ又ハ居住スルコトヲ許スヘシ

第六條 受任國ハ國際聯盟理事會ヲ満足セシムヘキ年報ヲ同理事會ニ提出スヘシ該年報中ニハ本地域ニ關スル詳細ナル情報ヲ記載シ且第二條乃至第五條ニ依リ負擔シタル義務ヲ實行スル爲ニ執リタル諸般ノ措置ヲ表示スヘシ

第七條 本委任統治條項ノ規定ヲ變更スルニハ國際聯盟理事會ノ同意ヲ要ス

受任國ハ本委任統治條項ノ規定ノ解釋又ハ適用ニ關シ受任國ト他ノ聯盟國トノ間ニ紛争ヲ生シタル場合ニ於テ其ノ紛争カ交渉ニ依リ解決スルコト能ハサルトキハ之ヲ國際聯盟規約第十四條ニ規定スル常設國際司法裁判所ニ付託スヘキコトニ同意ス

合衆國ハ「ヴェルサイユ」條約ヲ批准セス且前記委任ニ關スル協定ニ參加セサリシコトヲ思ヒ

前記諸島殊ニ「ヤップ」島ニ於ケル兩國政府及其ノ各自ノ國民ノ權利ニ關シ確定的了解ニ到達セムコトヲ希望シ此ノ目的ノ爲條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ
日本國皇帝陛下

亞米利加合衆國駐劄特命全權大使男爵弊原喜重郎

亞米利加合衆國大統領

合衆國國務卿「チアールス・エヴァンス・ヒューズ」

前記各委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ如ク協定セリ

第一條

本條約ノ規定ヲ留保シテ合衆國ハ日本國カ前記委任ニ依リ太平洋中赤道以北ニ位スル一切ノ舊獨逸領諸島ノ施政ヲ行フコトニ同意ス

第二條

合衆國ハ國際聯盟ノ聯盟國ニ非サルモ同國及其ノ國民ハ前記委任統治條項第三條、第四條及第五條ニ規定スル日本國ノ約束ノ一切ノ利益ヲ享クヘシ

條約國ハ尙左ノ如ク約定ス

(一) 日本國ハ公ノ秩序及善良ノ風俗ニ反セサル限り良心ノ完全ナ

合衆國及其ノ國民ハ現存「ヤップ」「グアム」海底電信線又ハ將來合衆國若ハ其ノ國民ノ敷設シ若ハ運用スルコトアルヘキ「ヤップ」島ニ接續スル海底電信線ノ陸揚及運用ニ關スル一切ノ事項ニ付日本國又ハ他ノ各國及其ノ各自ノ國民ト全然均等ノ地歩ニ於テ「ヤップ」島ニ自由ニ出入スルコトヲ得ヘシ

前項ニ定ムル權利及特權ハ又無線電信ニ依ル通信ニ關シ合衆國政府及其ノ國民ニ許與セラルヘシ但シ日本國政府カ「ヤップ」島ニ適當ナル無線電信局ヲ設立維持シ差別的料金ヲ課スルコトナク又順位ヲ附スルコトナク海底電信線及船舶又ハ海岸ニ在ル他ノ無線電信局トノ間ニ有效ニ通信ヲ接續スル限リハ合衆國又ハ其ノ國民カ同島ニ於テ無線電信局ヲ設置スルノ權利ノ行使ハ之ヲ停止スヘシ

第三條

ヘシ但シ右變更ニ對シ合衆國カ明ニ同意シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

- ル自由及各種禮洋ノ自由執行ヲ右諸島ニ於テ確保スヘシ斯ル一切ノ宗教ノ米國人宣教師ハ右諸島ニ入り且右諸島内ニ旅行シ及居住シ並右諸島内ニ於テ財産ヲ取得シ及占有シ、宗教的建物ヲ建設シ及學校ヲ開設スルノ自由ヲ有スヘシ尤モ日本國ハ公ノ秩序及善政ヲ維持スルニ必要ナルヘキ監理ヲ行ヒ且右監理上必要ナル一切ノ措置ヲ執ルノ權利ヲ有スルモノトス
- (二) 委任統治諸島ニ於ケル米國人ノ既得財產權ハ尊重セラルヘク且如何ナル手段ニ依ルモ侵害セラレサルヘシ
- (三) 日本國及合衆國間ノ現存諸條約ハ委任統治諸島ニ之ヲ適用スヘシ
- (四) 日本國ハ其ノ國際聯盟理事會ニ提出スヘキ委任ノ統治ニ關スル年報ノ複本ヲ合衆國ニ送付スヘシ
- (五) 本條約ニ記載シタル事項ハ本條約ニ引用シタル委任統治條項ニ加ヘラルルコトアルヘキ變更ニ依リ影響ヲ受クルコトナカル

第四條

第三條ニ定ムル權利ニ關シテ左記諸項ノ特殊權利、特權及免除ハ電氣通信ニ關スル限り合衆國及其ノ國民ハ「ヤップ」島ニ於テ之ヲ享有スヘシ

- (一) 合衆國國民ハ同島ニ於テ無制限ノ居住權ヲ有スヘク且合衆國及其ノ國民ハ日本國若ハ他ノ各國又ハ其ノ各自ノ國民ト全然均等ノ地歩ニ於テ一切ノ動産不動産及之ニ關スル利益（土地、建物、住居、事務所、工場及附屬物ヲ含ム）ヲ取得シ及保持スルノ權利ヲ有スヘシ
- (二) 合衆國國民ハ第三條ノ規定ニ從ヒ同島ニ於テ海底電信線ヲ陸場及運用シ若ハ無線電信局ヲ設置スルカ爲又ハ本號及第三條ニ定ムル權利及特權ヲ享有スルカ爲許可又ハ免許ヲ受クルノ義務ヲ有セス
- (三) 海底電信線又ハ無線電信ニ依ル通信又ハ運用ニ關シ檢閲又ハ

監督ヲ行フヘカラス

- (四) 合衆國國民ハ其ノ身體及財産ニ付同島出入ノ完全ナル自由ヲ有スヘシ
- (五) 海底電信線若ハ無線電信局ノ運用ニ關シ又ハ財産、人若ハ船舶ニ關シ租稅、港灣若ハ陸揚ニ關スル課金又ハ如何ナル性質ノ取立金モ一切之ヲ徵收スヘカラス
- (六) 差別的警察規則ハ之ヲ實施スヘカラス
- (七) 日本國政府ハ合衆國又ハ其ノ國民カ他ノ方法ヲ以テシテ同島ニ於テ電氣通信ノ目的ノ爲必要ナル財産又ハ便宜ヲ得ルコト能ハサル場合ニハ之ヲ同國又ハ其ノ國民ニ確保スル爲公用徵收權ヲ行使スヘシ
- 右徵收セラレヘキ土地ノ位置及面積ハ各場合ノ需要ニ從ヒ兩國政府間ニ協定スヘキモノトス同島ニ於テ電氣通信ノ目的ニ供セラルル合衆國又ハ其ノ國民ノ財産及便宜ハ公用徵收ヲ受クルコ

トナカルヘシ

第五條

本條約ハ締約國ニ於テ其ノ各自ノ憲法ニ從ヒ批准セラルヘシ本條約ノ批准書ハ出來得ル限リ遠ニ華盛頓ニ於テ交換スヘク且本條約ハ其ノ批准書交換ノ日ヨリ實施セラルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名調印ス

千九百二十二年二月十一日華盛頓市ニ於テ本書ニ通ヲ作成ス

幣 原 喜 重 郎 (印)

「チアールスコエヴァンスロヒューズ」(印)

四 聯盟脫退通告文 (昭和八年三月二十七日、
外務大臣ヨリ聯盟事務總長宛)

帝國政府ハ東洋ノ平和ヲ確保シ延イテ世界ノ平和ニ貢獻セントスル帝國ノ國是ガ各國間ノ平和安寧ヲ企圖スル國際聯盟ノ使命ト其ノ精神ヲ同ジウスルコトヲ認メ過去十有三年ニ亘リ原聯盟國トシテ又常任理事國トシテ此ノ崇高ナル目的ノ達成ニ協力シ來リタルヲ欣快トスルモノナリ而シテ其ノ間帝國ガ常ニ他ノ如何ナル國ニモ怠ラザル熱誠ヲ以テ聯盟ノ事業ニ參畫セルハ嚴トシテ動カスベカラザル事跡ナルト同時ニ帝國政府ハ現下國際社會ノ情勢ニ鑑ミ世界諸地方ニ於ケル平和ノ維持ヲ計ランガ爲ニハ此等各地方ノ現實ノ事態ニ即シテ聯盟規約ノ運用ヲ行フヲ要シ且斯ノ如キ公正ナル方針ニ則リ初テ聯盟ガ其ノ使命ヲ全ウシ其ノ權威ノ増進ヲ期シ得ベキヲ確信セリ。昭和六年九月日支事件ノ聯盟付託ヲ見ルヤ帝國政府ハ終始右確信ニ基キ聯盟ノ諸會議其ノ他ノ機會ニ於テ聯盟ガ本事件ヲ處理スルニ公

正妥當ナル方法ヲ以テシ眞ニ東洋平和ノ増進ニ寄與スルト共ニ其ノ威信ヲ顯揚センガ爲ニハ同方面ニ於ケル現實ノ事態ヲ的確ニ把握シ該事態ニ適應シテ規約ノ運用ヲ爲スノ肝要ナルヲ提唱シ就中支那ガ完全ナル統一國家ニ非ズシテ其ノ國內事情及國際關係ハ複雑難澁ヲ極メ變則例外ノ特異性ニ富メルコト、從テ一般國際關係ノ規準タル國際法ノ諸原則及慣例ハ支那ニ付テハ之ガ適用ニ關シ著シキ變更ヲ加ヘラレ其ノ結果現ニ特殊且異常ナル國際慣行成立シ居レルコトヲ考慮ニ入ルルノ絶對ニ必要ナル旨力説強調シ來レリ

然ルニ過去十七箇月間聯盟ニ於ケル審議ノ經過ニ徴スルニ多數聯盟國ハ東洋ニ於ケル現實ノ事態ヲ把握セザルカ又ハ之ニ直面シテ正當ナル考慮ヲ拂ハザルノミナラズ聯盟規約其ノ他ノ諸條約及國際法ノ諸原則ノ適用殊ニ其解釋ニ付帝國ト此等聯盟國トノ間ニ屢々重大ナル意見ノ相違アルコト明トナレリ其ノ結果本年二月二十四日臨時總會ノ採擇セル報告書ハ帝國ガ東洋ノ平和ヲ確保セントスル外何等意

圖ナキノ精神ヲ願ミザルト同時ニ事實ノ認定及之ニ基ク論斷ニ於テ甚シキ誤謬ニ陥リ就中九月十八日事件當時及其後ニ於ケル日本軍ノ行動ヲ以テ自衛權ノ發動ニ非ズト憤斷シ又同事件前ノ緊張狀態及事件後ニ於ケル事態ノ惡化ガ支那側ノ全責任ニ屬スルヲ看過シ爲ニ東洋ノ政局ニ新ナル紛糾ノ因ヲ作レル一方滿洲國成立ノ真相ヲ無視シ且同國ヲ承認セル帝國ノ立場ヲ否認シ東洋ニ於ケル事態安定ノ基礎ヲ破壊セントスルモノナリ殊ニ其ノ勸告中ニ掲ゲラレタル條件ガ東洋ノ康寧確保ニ何等貢獻シ得ザルハ本年二月二十五日帝國政府陳述書ニ詳述セル所ナリ

之ヲ要スルニ多數聯盟國ハ日支事件ノ處理ニ當リ現實ニ平和ヲ確保スルヨリハ適用不能ナル方式ノ尊重ヲ以テ一層重要ナリトシ又將來ニ於ケル紛争ノ禍根ヲ芟除スルヨリハ架空的ナル理論ノ擁護ヲ以テ一段貴重ナリトセルモノト見ルノ外ナク他面此等聯盟國ト帝國トノ間ニ規約其ノ他ノ條約ノ解釋ニ付重大ナル意見ノ相違アルコト前記

ノ如クナルヲ以テ茲ニ帝國政府ハ平和維持ノ方策殊ニ東洋平和確立ノ根本方針ニ付聯盟ト全然其ノ所信ヲ異ニスルコトヲ確認セリ仍テ帝國政府ハ此ノ上聯盟ト協力スルノ餘地ナキヲ信シ聯盟規約第一條第三項ニ基キ帝國ガ國際聯盟ヨリ脫退スルコトヲ通告スルモノナリ

第四 四國條約

(一) 概 說

四國條約ナルモノハ、太平洋上ニ島嶼ヲ領有セル日英米佛ノ四國間ニ於テ、相互ニ其ノ島嶼ニ關スル領土權ヲ尊重シ、之ニ關シ紛議ヲ生ジタル場合又ハ第三國ノ侵略的行爲ニ依リ右ノ領土權ノ脅カサルル場合ニ於ケル四國ノ協同的處理ヲ規定セルモノナリ。海軍軍備制限條約、九國條約等ト共ニ華府會議ニ於テ締結セラレタルモノニシテ、歴史的ニハ同會議ニ於テ廢棄セラレタル日英同盟ニ代リテ太平洋新平和機構ノ基礎ヲナシ、無力ナル聯盟規約ニ依ル平和保障ヲ補強セルモノナリ。

四國條約ノ内容ヲ檢討スルニ、ソノ適用ヲ受クベキ範圍ハ同條約、同條約所屬聲明及追加協定ニ依リ、太平洋上ニ散在セル日英米佛ノ領有セル島嶼ニ限ラレ、米大陸及佛領印度支那ノ如キハソノ適用ヨリ除外セラレ居レリ。濠洲及新西蘭ハ日本本土ヨリ廣大ナルモ、英

ハ、該條約第二三條及一九三四年十二月二十九日ノ帝國政府ヨリ米國政府ヘノ同條約廢棄通告ニ依リ失効シ現在ハ効力ヲ有スルモノニ非ズ。參考迄ニ帝國ヲ當事國トセル現行諸條約編中ニ掲ゲタルモノナリ。

國ノ海外領土ナルノ故ヲ以テ其ノ適用ヲ受ケ、日本本土ハ太平洋上ノ島嶼ナレドモ本國タルノ故ヲ以テ適用ヨリ除外セラル。太平洋上ノ日、英ノ委任統治地タル島嶼ニモ夫々該條約ノ適用アリ。然シテ一九四六年比律賓ノ獨立完成ノ曉ニハ、同島ハ現在ノ葡領及蘭領島嶼ト同様、該條約ノ適用範圍外ニ立ツニ至ルベシ。

本條約規定中ノ「紛議」ニハ國際法ノ原則上專ラ國內法權ニ屬スル問題ハ包含セラルコトナシ。米國側ニテハ移民事項及輸入關稅問題ヲ以テ國內法上ノ問題ト解シ居レリ。本條約ニテハ、條約上ノ義務違反ニ對スル軍事的制裁ノ如キハ條約上規定セラレ居ラズ、米國ヲ加ヘタルコトニ依リ聯盟規約ニ於ル平和保障ヲ政治的ニ強化シタルニ過ギズ。

日英米佛伊ノ五國間ニ於テ保有シ得ベキ主力艦比率ニ就規定セル華盛頓海軍軍備制限條約ニ於テモ、太平洋平和維持ノ趣旨ニ基キ該條約締結當時ノ現状ヲ維持スベキ旨規定セラレタリ。然レドモ右規定

(二) 條約文

太平洋方面ニ於ケル島嶼タル屬地及島嶼タル領地ニ關スル匹國條約

- 一九二一年(大正一〇年)一月三日 華盛頓ニ於テ署名調印
- 一九二二年(大正一一年)八月五日 批准
- 一九二三年(大正一二)年八月十七日 華盛頓ニ於テ批准書寄託
- 同 年 同月同 日 公布
- 同 年 同月同 日 實施

亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國及日本國ハ一般ノ平和ヲ確保シ且太平洋方面ニ於ケル其ノ島嶼タル屬地及島嶼タル領地ニ關スル其ノ權利ヲ維持スルノ目的ヲ以テ之カ爲條約ヲ締結スルコトニ決シ左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ

亞米利加合衆國大統領

- 合衆國人民「チャールズ、エヴァンス、ヒューズ」
- 同 「ヘンリー、カボット、ロツジ」
- 同 「オズカー、ダブリュー、アンダウッド」
- 同 「エリヒュー、ルイト」
- 大不列顛愛蘭聯合王國及大不列顛海外領土皇帝印度皇帝陛下 樞密院議長國會議員「アーサー、ジェームス、バルフォア」
- 海軍大臣男爵「リ、オヴ、フェアラム」
- 亞米利加合衆國駐節特命全權大使「サー、オークランド、キアンブル、ゲデス」
- 加 奈 陀 「ロバート、レアド、ポードン」
- 濠太利聯邦 國防大臣「ジョージ、フォスター、ピアス」
- 新 西 蘭 新西蘭最高法院判事「サー、ジョン、ウイリアム、サルモンド」

B-0033

0296

南阿弗利加聯邦

國會議員「アーサー、ジェームズ、バルフォア」

印度

印度參議院議員「ヴァリグマン、サンカラナラヤナ、スリニヴァサ、サストリア」

佛蘭西共和國大統領

前内閣議長下院議員「ルネ、ヴィヴィアニ」

殖民大臣下院議員「アルベール、サロー」

亞米利加合衆國駐劄特命全權大使「ジュール、ジー、ジュラン」

日本國皇帝陛下

海軍大臣男爵加藤友三郎

亞米利加合衆國駐劄特命全權大使男爵幣原喜重郎

公爵徳川家達

外務次官埴原正直

右各委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル
後左ノ如ク協定セリ

第一條

締約國ハ互ニ太平洋方面ニ於ケル其ノ島嶼タル屬地及島嶼タル領地
ニ關スル其ノ權利ヲ尊重スヘキコトヲ約ス
締約國ノ何レカノ間ニ太平洋問題ニ起因シ且前記權利ニ關スル爭議
ヲ生シ外交手段ニ依リテ満足ナル解決ヲ得ルコト能ハス且其ノ間ニ
幸ニ現存スル圓滿ナル協調ニ影響ヲ及ボスノ虞アル場合ニ於テハ右
締約國ハ共同會議ノ爲他ノ締約國ヲ招請シ當該事件全部ヲ考量調整
ノ目的ヲ以テ其ノ議ニ付スヘシ

第二條

前記ノ權利ヲ別國ノ侵略的行爲ニ依リ脅威セララルニ於テハ締約國
ハ右特殊事態ノ急ニ應スル爲共同ニ又ハ各別ニ執ルヘキ最有效ナル
措置ニ關シ了解ヲ遂ケムカ爲充分ニ且隔意ナク互ニ交渉スヘシ

第三條
 本條約ハ實施ノ時ヨリ十年間效力ヲ有シ且右期間滿了後ハ十二月前
 ノ豫告ヲ以テ之ヲ終了セシムル各締約國ノ權利ノ留保ノ下ニ引續キ
 其ノ效力ヲ有ス

第四條

本條約ハ締約國ノ憲法上ノ手續ニ從ヒ成ルヘク速ニ批准セラルヘク
 且華盛頓ニ於テ行ハルヘキ批准書寄託ノ時ヨリ實施セラルヘシ千九
 百十一年七月十三日倫敦ニ於テ締結セラレタル大不列顛國及日本國
 間ノ協約ハ之ト同時ニ終了スルモノトス合衆國政府ハ批准書寄託ノ
 調書ノ認證謄本ヲ各署名國ニ送付スヘシ

本條約ハ佛蘭西語及英吉利語ヲ以テ本文トシ合衆國政府ノ記錄ニ寄
 託保存セラルヘク其ノ認證謄本ハ同政府之ヲ各署名國ニ送付スヘシ
 右證據トシテ前記各全權委員ハ本條約ニ署名ス

千九百二十一年十二月十三日華盛頓市ニ於テ之ヲ作成ス

- チアールズ、エヴァンス、ヒューズ ④
- ヘンリー、カボット、ロツジ ④
- オスカ、ダブリュー、アングラウド ④
- エリ ヒュー、ルート ④
- アーサー、ジェームス、バルフォア ④
- リー、オ、ヴ、フェアラム ④
- エー、シー、ゲデス ④
- アール、エル、ボーデン ④
- ジョー、エフ、ピアス ④
- ジョン、ダブリュー、サルモンド ④
- アーサー、ジェームス、バルフォア ④
- ヴァー、エス、スリニヴァサ、サストリ ④
- ルネ、ヴァイヴァア ④

ルネ、ヴィヴィアニ
 アイ、サロイ
 ジュスラン
 加藤友三郎
 幣原喜重郎
 徳川家達
 埴原正直

千九百二十一年十二月十三日「ディストリクト、オヴ、コロンビア」
 華盛頓

チアールス、エヴァンス、ヒューズ
 ヘンリー、カボット、ロッジ
 オスカー、ダブリュー、アングラウツド
 エリヒュー、ルート
 アイサー、ジェームス、バルフォア
 リー、オヴ、フェアラム
 エー、ジー、ゲデス
 アール、エル、ポードン
 ジー、エフ、ピアス
 ジョン、ダブリュー、サルモンド
 アイサー、ジェームス、バルフォア
 ヴィー、エス、スリニヴァサ、サストリア

B-0033

0300

三、太平洋方面ニ於ケル和蘭國ノ島嶼タル
屬地ニ關スル權利尊重ニ關スル聲明

一九二一年（大正一〇年）二月 五日附
一九二三年（大正一二年）八月一七日告示

四國條約ニ關聯シテ日英米佛四國政府ハ和蘭國政府ニ對シ當該國
駐節ノ各自國使臣ヲシテ左ノ趣旨ノ公文ヲ送付セシムルコトニ決
シ帝國政府ハ和蘭國政府ニ宛テ大正十年二月五日附ヲ以テ左ノ交
付ヲ了セリ

日本國ハ亞米利加合衆國、英帝國及佛蘭西國トノ間ニ、一般ノ平和
ヲ確保シ且太平洋方面ニ於ケル各自ノ島嶼タル屬地及島嶼タル領地
ニ關スル其ノ權利ヲ維持スルノ目的ヲ以テ千九百二十一年十二月十
三日條約ヲ締結シ之ニ依リ締約國ハ互ニ右屬地及領地ニ關スル其ノ
權利ヲ尊重スルコトヲ協定セリ
和蘭國ハ前記條約ノ署名國ニ非ス從テ太平洋方面ニ於ケル同國ノ屬

地ハ前記協定中ニ包含セラレサルニ因リ日本國政府ハ該條約ノ精神
ニ反スル斷定ノ生スル餘地ナカラシメムコトヲ望ミ太平洋方面ニ於
ケル和蘭國ノ島嶼タル屬地ニ關スル同國ノ權利ヲ尊重スルコトヲ固
ク決意シタル旨茲ニ聲明セムト欲ス

四 太平洋方面ニ於ケル葡萄牙國ノ島嶼タル屬地
ニ關スル權利尊重ニ關スル聲明

一九二二年（大正十一年）二月一二日附

一九二三年（大正十二年）八月一七日告示

四國條約ニ關聯シテ日英米佛四國政府ハ葡萄牙國政府ニ對シ當該國駐節ノ各自國使臣ヲシテ左ノ趣旨ノ公文ヲ送付セシムルコトニ決シ帝國政府ハ葡萄牙國政府ニ宛テ大正十一年二月十二日附ヲ以テ左ノ通交付ヲ了セリ

日本國ハ亞米利加合衆國、英帝國及佛蘭西國トノ間ニ、一般ノ平和ヲ確保シ且太平洋方面ニ於ケル各自ノ島嶼タル屬地及島嶼タル領地ニ關スル其ノ權利ヲ維持スルノ目的ヲ以テ千九百二十一年十二月十三日條約ヲ締結シ之ニ依リ締約國ハ互ニ右屬地及領地ニ關スル其ノ權利ヲ尊重スルコトヲ協定セリ

葡萄牙國ハ前記條約ノ署名國ニ非ズ從テ太平洋方面ニ於ケル同國ノ

屬地ハ前記協定中ニ包含セラレサルニ因リ日本國政府ハ該條約ノ精神ニ反スル斷定ノ生スル餘地ナカラシメムコトヲ望ミ太平洋方面ニ於ケル葡萄牙國ノ島嶼タル屬地ニ關スル同國ノ權利ヲ尊重スルコトヲ固ク決意シタル旨茲ニ聲明セムト欲ス

左ノ留保及了済ヲ以テ寄託セララルモノナルコトヲ聲明シタリ
 合衆國ハ本條約ノ前文ノ記述ニ於テ又ハ其ノ條項ニ於テ武力ニ關
 スル約定ナク尚且ナク又防禦ニ參加スヘキ義務ナシト了解ス
 提出セラレタル批准書ハ之ヲ審査シ其ノ妥當ナルヲ認メタルヲ以テ
 國務省ノ記録ニ寄託スル爲亞米利加合衆國政府ニ之ヲ委託シタリ
 右證據トシテ本調書ニ署名セリ其ノ認證謄本ハ亞米利加合衆國政府
 之ヲ前記條約ノ各署名國ニ送付スヘシ
 千九百二十三年八月十七日正午華盛頓ニ於テ

合 衆 國
 チアールズ、エヴァンス、ヒューズ
 英 帝 國
 エッチ、ジー、チルトン

亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國及日本國間ニ於ケル華盛頓ニ於
 二月十三日華盛頓ニ於テ締結セラレタル太平洋方面ニ於ケル島嶼タ
 ル屬地及島嶼タル領地ニ關スル條約第四條ニ從ヒ亞米利加合衆國、
 英帝國、佛蘭西國及日本國ノ代表者タル下名ハ其ノ代表スル政府ノ
 前記條約ノ批准書ヲ亞米利加合衆國政府ニ寄託スル爲日本華盛頓ニ
 於ケル國務省ニ會合セリ

亞米利加合衆國ノ代表者ハ合衆國ノ批准書ハ該批准書中ニ記載セル

一九二三年（大正一二年）八月一七日 華盛頓ニ於
 テ署名調印
 同 年一〇月一五日告 示

亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國及日本國ハ千九百二十一年十二月十三日華盛頓ニ於テ署名シタル四國條約ノ追加タル左ノ條項ヲ各其ノ全權委員ニ依リ協定シタリ

前記條約ニ使用セラレタル「島嶼タル屬地及島嶼タル領地」ナル語ハ之ヲ日本國ニ適用スルニ付テハ單ニ樺太（即チ薩哈噠島ノ南部）、臺灣澎湖列島竝日本國ノ委任統治ノ下ニ在ル諸島ノミヲ包含スルモノトス

六 太平洋方面ニ於ケル島嶼タル屬地及島嶼タル領地ニ關スル四國條約追加協定

一九二二年（大正十一年）二月 六日 署名調印

同 年 八月 五日 批准

一九二三年（大正十二年）八月 一七日 華盛頓ニ於テ批准書寄託

同 年 同月 同日 公布

同 年 同月 同日 實施

佛蘭西國
アンドレー、ド、ラウレリー^④

日本國
壇原正直^④

太平洋方面ニ於ケル島嶼タル屬地及島嶼タル領地ニ關スル四國條約締約國措置振一覽表

締約國	批准ノ日	批准書寄託及實施ノ日	備考
米國	一九二三年六月九日	一九二三年八月七日	留保附（批准書寄託調書参照）
佛蘭西國	一九二三年七月二十八日	一九二三年八月七日	
英帝國	一九二三年八月四日	一九二三年八月七日	
日本國	一九二三年八月五日	一九二三年八月七日	

B-0033

0304

ジー、エフ、ビース
 ジョン、ダブリュー、サルモンド
 アイサー、ジェームス、バルフォア
 ヴィー、エス、スリニヴァサ、サストリ
 アイ、サロ
 ジュ、スラ
 加藤友三郎
 幣原喜重郎
 植田正直

本協定ハ前記條約ニ追加トシテ之ト同一ノ效力ヲ有ス
 千九百二十一年十二月十三日ノ前記條約中批准ニ關スル第四條ノ規
 定ハ佛蘭西語及英吉利語ヲ以テ本文トシ合衆國政府ノ記録ニ寄託保
 存セラルヘク其ノ認證謄本ハ同政府之ヲ他ノ各締約國ニ送付スヘシ
 右證據トシテ前記各全權委員ハ本協定ニ署名ス
 千九百二十二年二月六日華盛頓ニ於テ之ヲ作成ス

チアールス、エヴァンス、ヒュース
 ヘンリー、カボット、ロツジ
 オスカー、ダブリュー、アンドラウツド
 エリヒュー、ル
 アイサー、ジェームス、バルフォア
 リー、オヴ、フェアラム
 エー、シー、ゲデス
 アイ、エル、ポードン

B-0033

0305

七 亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國及日本國間ニ千九百二十一年十二月十三日締結セラレタル太平洋方面ニ於ケル島嶼タル屬地及島嶼タル領地ニ關スル條約ノ追加トシテ右各國間ニ千九百二十二年二月六日華盛頓ニ於テ締結セラレタル協定ノ批准書寄託調書

一九二三年（大正一二年）八月一七日 華盛頓ニ於テ署名調印
同 年一〇月一五日告 示

亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國及日本國間ニ千九百二十一年十二月十三日華盛頓ニ於テ締結セラレタル太平洋方面ニ於ケル島嶼タル屬地及島嶼タル領地ニ關スル條約ノ追加トシテ右四國間ニ千九百二十二年二月六日華盛頓ニ於テ締結セラレタル協定ニ從ヒ亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國及日本國ノ代表者タル下名ハ其ノ代表スル政府ノ前記協定ノ批准書ヲ亞米利加合衆國政府ニ寄託スル爲本日華盛頓ニ於ケル國務省ニ會合セリ

亞米利加合衆國ノ代表者ハ合衆國ノ批准書ハ該批准書中ニ記載セル留保及了解ヲ以テ寄託セラルモノナルコトヲ聲明シタリ右留保及了解ハ千九百二十一年十二月十三日ノ條約ノ署名國タル四國ノ全權委員ニ依リ千九百二十一年十二月十三日署名セラレタル意嚮及了解ニ關スル聲明ヲ再述スルモノニシテ即左ノ如シ

- 一 太平洋ニ於ケル屬地ニ關スル四國條約ハ太平洋ニ於ケル委任統治諸島ニ之ヲ適用ス但シ該條約ノ締結ハ之ヲ以テ亞米利加合衆國カ右委任統治ニ對シ同意ヲ與ヘタルモノト認ムルコトヲ得ス且亞米利加合衆國ト當該委任國トノ間ニ右委任統治諸島ニ關スル協定ノ締結ヲ妨クルモノニ非ス
- 二 太平洋ニ於ケル屬地ニ關スル四國條約第一條第二項ニ掲クル爭議ハ國際法ノ原則ニ依リ專ラ當該國ノ國內法權ニ屬スル問題ヲ含ムモノト解スヘカラス

提出セラレタル批准書ハ之ヲ審査シ其ノ妥當ナルヲ認メタルヲ以テ

B-0033

0306

日 本 國	英 帝 國	佛 蘭 西 國	米 國	締 締 國	批准ノ日	批准書寄託 及實施ノ日	備 考
一九二二 八 五	一九二二 八 四	一九二二 七 二 八	一九二二 六 九 一				留保ヲ附ス(批准 書寄託調書参照)
一九二二 三 八 一 七	一九二二 三 八 一 七	一九二二 三 八 一 七	一九二二 三 八 一 七				

太平洋方面ニ於ケル島嶼タル屬地及島嶼タル領地ニ關スル四國條約追加協定締約國措置振一覽表

國務省ノ記録ニ寄託スル爲亞米利加合衆國政府ニ之ヲ委託シタリ
右證據トシテ本調書ニ署名セリ其ノ認證謄本ハ亞米利加合衆國之ヲ
前記條約ノ各署名國ニ送付スヘシ
千九百二十三年八月十七日正午華盛頓ニ於テ
亞米利加合衆國
チアールス、エヴァンス、ヒューズ^印
英 帝 國
エッチ、ジー、チルトン^印
佛 蘭 西 國
アンドレー、ド、ラブレリー^印
日 本 國
植 原 正 直^印

B-0033

0307

加 奈 陀
 「ロバート、レアド、ボーデン」

濠 太 利 聯 邦
 内務大臣上院議員「ジョージ、フォスター、ピアス」

新 西 蘭
 新西蘭最高法院判事「サー、ジョン、ウィリアム、サルモンド」

南 阿 弗 利 加 聯 邦
 國會議員「アーサー、ジェームス、バルフォア」

同 「オスカール、ダブリュー、アンダウッド」

同 「エリヒュー、ルート」

大不列顛愛蘭聯合王國及大不列顛海外領土皇帝印度皇帝陛下
 樞密院議長國會議員「アーサー、ジェームス、バルフォア」

海軍大臣男爵「リー、オヴ、フェアラム」

亞米利加合衆國駐節特命全權大使「サー、オー克蘭ド、
 キアンブル、ゲデス」

「海軍軍備制限ニ關スル條約」

一九二二年（大正十一年）二月六日華盛頓ニ於テ署名調印
 同 年 八月五日批 准

一九二三年（大正十二年）八月一七日華盛頓ニ於テ批准書寄託
 同 年 同月同日公 布

同 年 同月同日實 施

亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國、伊太利國及日本國ハ
 一般ノ平和ノ維持ニ貢獻シ且軍備競争ノ負擔ヲ輕減セシムルコトヲ
 望ミ

右目的ヲ達成スル爲各自ノ海軍軍備ヲ制限スルノ條約ヲ締結スルコ
 トニ決シ之カ爲左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ

亞米利加合衆國大統領
 合衆國人民「チャールス、エヴァンス、ヒューズ」

同 「ヘンリー、カボット、ロッジ」

印度

印度參議院議員「ヴァリグマン、サンカラナラヤナ、スリニヴァサ、サストリ」

佛蘭西共和國大統領

殖民大臣下院議員「アルベール、サロー」

亞米利加合衆國駐劄特命全權大使「ジュール、ジー、ジュスラン」

伊太利國皇帝陛下

參議院議員「カルロ、シアンツェル」

亞米利加合衆國駐劄特命全權大使參議院議員「ヴィットリオ、ロランデイ、リッチ」

參議院議員「ルイジ、アルベルテイニ」

日本國皇帝陛下

海軍大臣男爵加藤友三郎

亞米利加合衆國駐劄特命全權大使男爵幣原喜重郎

外務次官植原正直

右各委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ如ク協定セリ

第十九條

合衆國、英帝國及日本國ハ左ニ掲クル各自ノ領土及屬地ニ於テ要塞及海軍根據地ニ關シ本條約署名ノ時ニ於ケル現狀ヲ維持スヘキコトヲ約定ス

(一) 合衆國カ太平洋ニ於テ現ニ領有シ又ハ將來取得スルコトアルヘキ島嶼タル屬地但シ(イ) 合衆國、「アラスカ」及巴奈馬運河地帯ノ海岸ニ近接スル島嶼(「アリニューシアン」諸島ヲ包含セス) 並(ロ) 布哇諸島ヲ除ク

(二) 香港及英帝國カ東經百十度以東ノ太平洋ニ於テ現ニ領有シ又ハ將來取得スルコトアルヘキ島嶼タル屬地但シ(イ) 加奈陀海岸ニ近

B-0033

0309

接スル島嶼(㉑)濠太利聯邦及其ノ領土並(㉒)新西蘭ヲ除ク
 (㉓)太平洋ニ於ケル日本國ノ下記ノ島嶼タル領土及屬地即チ千島諸
 島、小笠原諸島、奄美大島、琉球諸島、臺灣及澎湖諸島並日本
 國ガ將來取得スルコトアルヘキ太平洋ニ於ケル島嶼タル領土及
 屬地

前記ノ現状維持トハ右ニ掲クル領土及屬地ニ於テ新ナル要塞又ハ海
 軍根據地ヲ建設セラルヘキコト、海軍力ノ修理及維持ノ爲現存スル
 海軍諸設備ヲ増大スルノ處置ヲ執ラサルヘキコト並右ニ掲ク領土及
 屬地ノ沿岸防禦ヲ増大セサルヘキコトヲ謂フ但シ右制限ハ海軍及陸
 軍ノ設備ニ於テ平時慣行スルカ如キ磨損セル武器及裝備ノ修理及取
 替ヲ妨クルコトナシ

第二十三條

本條約ハ千九百三十六年十二月三十一日迄效力ヲ有ス締約國中何レ
 ノ一國ヨリモ右期日ノ二年前ニ本條約ヲ廢止スルノ意思ヲ通告セサ
 ルトキハ本條約ハ締約國ノ一國カ廢止ノ通告ヲ爲シタル日ヨリ二年
 ヲ經過スル迄引續キ其ノ效力ヲ有スヘク爾後本條約ハ締約國全部ニ
 對シ廢止セララルヘシ
 右通告ハ合衆國政府ニ對シ書面ヲ以テ之ヲ爲スヘク同政府ハ直ニ通
 告書ノ認證謄本ヲ爾餘ノ締約國ニ送付シ且通告書ヲ受領シタル日ヲ
 之ニ通知スヘシ該通告ハ右受領ノ日ニ行ハレタルモノト看做シ且其
 ノ日ヨリ效力ヲ生スルモノトス合衆國政府自ラ廢止ノ通告ヲ爲ス場
 合ニ於テハ其ノ通告ハ他ノ締約國ノ華盛頓駐節外交代表者ニ對シテ
 之ヲ行フヘク該通告ハ外交代表者ニ通牒ヲ爲シタル日ニ行ハレタル
 モノト看做シ且其ノ日ヨリ效力ヲ生スルモノトス

何レカノ一國ノ爲シタル廢止通告ガ效力ヲ生シタル日ヨリ二年内ニ
締約國全部ハ會議ヲ開催スヘシ

九 華盛頓海軍軍備制限條約廢止通告文

第二百五十號

以書翰啓上致候陳者本使ハ本國政府ノ訓令ニ依リ左ノ通閣下ニ通報
スルノ光榮ヲ有シ候

日本國政府ハ千九百二十二年二月六日「ワシントン」ニ於テ署名
セラレタル海軍軍備制限ニ關スル條約第二十三條ニ從ヒ茲ニ「ア
メリカ」合衆國政府ニ對シ右條約ヲ廢止スルノ意思ヲ通告ス依テ
右條約ハ千九百三十六年十二月三十一日後ハ效力ヲ有セザルモノ
トス

本使ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百三十四年十二月二十九日

「ワシントン」ニ於テ

齋藤 博

在「ワシントン」

國務長官 「コーデル、ハル」 閣下

B-0033

03:11

第五 支那ニ關スル九國條約
(一) 概 説

支那ニ關シ重大ナル利害ヲ有スル米、白、英、支、佛、伊、日、葡、葡間ニ締結セラレタル條約ニシテ、支那ノ領土保全並支那ニ於ケル機會均等及門戶開放ノ二大原則ヲ規定セルモノナリ。該條約ハ支那ニ對シ從來列強ノ取り來レル政策ノ最モ重要ナルモノヲ明文ヲ以テ、然モ露、獨ヲ除ク世界ノ殆ンド總テノ強國間ノ條約ニ依リ規定セルモノナル點ニ於テ重要ナル意義ヲ有ス。更ニ該條約ハ戰後ノ平和的協調的空氣ノ世界ヲ風靡セル時代ノ產物ナルヲ以テ、支那ノ安定ト發達トニ對スル列國ノ同情、援助ノ最モ顯著ニ觀取シ得ラルル點ニ於テ注目スベキモノアリ。而シテ該條約ハ米國政府ノ傳統的對支政策ヲ表現セルモノナルヲ以テ、米國政府及米國人民ハ絶エズ該條約ヲ振廻シ、該條約ヲシテ、宛モ太平洋平和保障條約ノ最重要ナルモノナルカノ如キ印象ヲ世界ニ與ヘツツアル點ハ、更ニ吾人ノ留意ス

ベキ點ナリ。

該條約ノ主タル内容ハ前述ノ如ク支那ノ領土保全及支那ニ於ケル機會均等、門戶開放ノ規定ナリ。而シテ該條約ハ支那ニ對シテモ、他ノ締約國ニ對スルト同様ニ義務ヲ課セシモノナルニ不拘支那側ハ該條約ヲ以テ宛モ支那以外ノ締約國ニノミ一方的義務ヲ課セシ如ク振舞ヘル點ニ於テソノ適用上ノ困難ニ逢着セリ。更ニ該條約ニハ太平洋ニ重要ナル利害關係ヲ有セル露國ノ加盟ヲ見ザル事、露國ハ外蒙ニ對シ事實上ノ侵略ヲナセルニ不拘、支那側ニ於テ九國條約ヲ擁護スル實力ナキコト等ハ該條約ノ適用ヲシテ益々困難ナラシメツツアリ。

(二) 條約文

一、支那ニ關スル九國條約

千九百廿二年二月六日華盛頓ニ於テ調印(英、葡文)
千九百廿二年八月五日 批 准

亞米利加合衆國、白耳義國、英帝國、支那國、佛蘭西國、伊太利國、日本國、和蘭國及葡萄牙國ハ

極東ニ於ケル專横ノ安定ヲ期シ支那ノ權利利益ヲ擁護シ且機會均等ノ基礎ノ上ニ支那ト他ノ列國トノ間ノ交通ヲ増進セムトスルノ政策ヲ採用スルコトヲ希望シ

右ノ目的ヲ以テ條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ

亞米利加合衆國大統領

合衆國人民「チアールス、エヴァンス、ヒューズ」

同 「ヘンリー、カボット、ロツジ」

同

「オスカロダブリュー。アングラウツド」

同

「エリヒュー、ルート」

白耳義國皇帝陛下

亞米利加合衆國駐劄特命全權大使男爵

「カルチエ、ド、マルシエンヌ」

大不列顛愛爾蘭聯合王國及大不列顛海外領土皇帝印度皇帝陛下

樞密院議長國會議員

「アーサー、ジェームス、バルフォア」

海軍大臣男爵「リ、オヴ、フェアラム」

亞米利加合衆國駐劄特命全權大使

「サー、ロバート、レアド、ボーデン」

加奈陀「サー、ロバート、レアド、ボーデン」

濠太利聯邦

内務大臣上院議員「ジョージ、フォスター、ピアス」

新西蘭

新西蘭最高法院判事

「サー、ジョン、ウイリアム、サルモンド」

南アフリカ聯邦

國會議員「アーサー、ジェームス、バルフォア」

印度

印度參議院議員「ヴァリグマン、サンカラナラヤナ、スリニヴァサ、サストリ」

支那共和國大統領

亞米利加合衆國駐節特命全權公使施肇基

英國駐節特命全權公使顧維鈞

前司法大臣王寵惠

佛蘭西共和國大統領

植民大臣下院議員「アルベール、サロー」

亞米利加合衆國駐節特命全權大使

「ジュール、ジー、ジュスラン」

伊太利國皇帝陛下

參議院議員「カルロ、シアンツェル」

亞米利加合衆國駐節特命全權大使參議院議員

「ヴィットリオ、ロランデイ、リッチ」

參議院議員「ルイジ、アルベルテイニ」

日本國皇帝陛下

海軍大臣男爵加藤友三郎

亞米利加合衆國駐節特命全權大使男爵幣原喜重郎

外務次官壇原正直

和蘭國皇帝陛下

特命全權公使「ヨックヘル、フランス、ベータールツ、ヴァンブロックランド」

亞米利加合衆國駐葡代理公使「ヨンクヘール、ウイルレム、ヘン
ドリック、ド、ポーフオール」

葡萄牙共和國大統領

亞米利加合衆國駐葡特命全權公使「アルテ」子爵

「ジョゼー、フランシスコ、デ、オルタ、マシャド、ダ、フラン
カ」

海軍大佐殖民省技術部長「エルネスト、ジュリオ、デ、カルヴァ
リオ、イ、ヴァスコンセロス」

右各委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル
後左ノ如ク協定セリ

第一條

支那國以外ノ締約國ハ左ノ通約定ス

(一) 支那ノ主權、獨立並其ノ領土的及行政的保全ヲ尊重スルコ
ト

(二) 支那カ自ラ有力且安固ナル政府ヲ確立維持スル爲最完全ニ
シテ且最障礙ナキ機會ヲ之ニ供與スルコト

(三) 支那ノ領土ヲ通シテ一切ノ國民ノ商業及工業ニ對スル機會
均等主義ヲ有效ニ樹立維持スル爲各盡力スルコト

(四) 友好國ノ臣民又ハ人民ノ權利ヲ減殺スヘキ特別ノ權利又ハ
特權ヲ求ムル爲支那ニ於ケル情勢ヲ利用スルコトヲ及右友好國
ノ安寧ニ害アル行動ヲ是認スルコトヲ差控フルコト

第二條

締約國ハ第一條ニ記載スル原則ニ違背シ又ハ之ヲ害スヘキ如何ナル
條約、協定、取極又ハ了解ヲモ相互ノ間ニ又ハ各別ニ若ハ協同シテ
他ノ一國又ハ數國トノ間ニ締結セサルヘキコトヲ約ス

第三條

一切ノ國民ノ商業及工業ニ對シ支那ニ於ケル門戶開放又ハ機會均等
ノ主義ヲ一層有效ニ適用スルノ目的ヲ以テ支那國以外ノ締約國ハ左

ヲ要求セサルヘク又各自國民ノ左ヲ要求スルコトヲ支持セサルヘキコトヲ約定ス

(イ) 支那ノ何レカノ特定地域ニ於テ商業上又ハ經濟上ノ發展ニニ關シ自己ノ利益ノ爲一般の優越權利ヲ設定スルニ至ルコトアルヘキ取極

(ロ) 支那ニ於テ適法ナル商業若ハ工業ヲ營ムノ權利又ハ公共企業ヲ其ノ種類ノ如何ヲ問ハス支那國政府若ハ地方官憲ト共同經營スルノ權利ヲ他國ノ國民ヨリ奪フカ如キ獨占權又ハ優先權或ハ其範圍、期間又ハ地理的限界ノ關係上機會均等主義ノ實際的適用ヲ無効ニ爲セシムルモノト認メラルルカ如キ獨占權又ハ優先權

本條ノ前記規定ハ特定ノ商業上、工業上若ハ金融上ノ企業ノ經營又ハ發明及研究ノ獎勵ニ必要ナルヘキ財産又ハ權利ノ取得ヲ禁スルモノト解釋スヘカラサルモノトス

支那國ハ本條約ノ當事國タルト否トヲ問ハス一切ノ外國ノ政府及國民ヨリノ經濟上ノ權利及特權ニ關スル出願ヲ處理スルニ付本條ノ前記規定ニ記載スル主義ニ違由スヘキコトヲ約ス

第四條

締約國ハ各自國民相互間ノ協定ニシテ支那領土ノ特定地方ニ於テ勢力範圍ヲ創設セムトシ又ハ相互間ノ獨占的機會ヲ享有スルコトヲ定メムトスルモノヲ支持セサルコトヲ約定ス

第五條

支那國ハ支那ニ於ケル全鐵道ヲ通シ如何ナル種類ノ不公平ナル差別ヲモ行ヒ又ハ許容セサルヘキコトヲ約定ス殊ニ旅客ノ國籍、其ノ出發國若ハ到達國、貨物ノ原產地若ハ所有者、其ノ積出國若ハ仕向國又ハ前記ノ旅客若ハ貨物カ支那鐵道ニ依リ輸送セララルル前若ハ後ニ於テ之ヲ運搬スル船舶其ノ他ノ輸送機關ノ國籍若ハ所有者ノ如何ニ依リ料金又ハ便宜ニ付直接間接ニ何等ノ差別ヲ設ケサルヘシ

支那國以外ノ締約國ハ前記鐵道中自國又ハ自國民カ特許條件、特殊協定其ノ他ニ基キ管理ヲ爲シ得ル地位ニ在ルモノニ關シ前項ト同趣旨ノ義務ヲ負擔スヘシ

第六條

支那國以外ノ締約國ハ支那國ノ參加セサル戰爭ニ於テ支那國ノ中立國トシテノ權利ヲ完全ニ尊重スルコトヲ約定シ支那國ハ中立國タル場合ニ中立ノ義務ヲ遵守スルコトヲ聲明ス

第七條

締約國ハ其ノ何レカノ一國カ本條約ノ規定ノ適用問題ヲ包含シ且右適用問題ノ討議ヲ爲スヲ望マシト認ムル事態發生シタルトキハ何時ニテモ關係締約國間ニ充分ニシテ且隔意ナキ交渉ヲ爲スヘキコトヲ約定ス

第八條

本條約ニ署名セサル諸國ニシテ署名國ノ承認シタル政府ヲ有シ且支

那國ト條約關係ヲ有スルモノハ本條約ニ加入スヘキコトヲ招請セラ
ルヘシ右目的ノ爲合衆國政府ハ非署名國ニ必要ナル通牒ヲ爲シ且其
ノ受領シタル回答ヲ締約國ニ通告スヘシ別國ノ加入ハ合衆國政府カ
其ノ通告ヲ受領シタル時ヨリ效力ヲ生スヘシ

第九條

本條約ハ締約國ニ依リ各自ノ憲法上ノ手續ニ從ヒ批准セララルヘク且
批准書全部ノ寄託ノ日ヨリ實施セララルヘシ右ノ寄託ハ成ルヘク速ニ
華盛頓ニ於テ之ヲ行フヘシ合衆國政府ハ批准書寄託ノ調書ノ認證曆
本ヲ他ノ締約國ニ送付スヘシ
本條約ハ佛蘭西語及英吉利語ノ本文ヲ以テ共ニ正文トシ合衆國政府
ノ記録ニ寄託保存セララルヘク其ノ認證曆本ハ同政府ヨリ他ノ各締約
國ニ之ヲ送付スヘシ

右證據トシテ前記各全權委員ハ本條約ニ署名ス

千九百二十二年二月六日華盛頓市ニ於テ之ヲ作成ス

願 維 鈞
 王 龍 憲
 アー、サロー
 シュストラン
 カルロ、シャンツェル
 ヴイー、ロランディ、リッチ
 ルイジ、アルベルテイニ
 加藤友三郎
 幣原喜重郎
 壇原 正直
 ベーラールツ、ヴァン、ブロックランド
 ダブリュー、ド、ボーフォール
 アル、テ
 エルネスト、デ、ヴァスニンセロス

印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印

チアールス、エヴァンス、ヒューズ
 ヘンリー、カボット、ロツジ
 オスカー、ダブリュー、アングウッド
 エリヒュー、ルト
 男爵カルチエ、ド、マルシエンヌ
 アーサー、ジエームス、バルフォア
 リー、オヴ、フェアラム
 エー、シー、ゲデス
 アール、エル、ボーデン
 ジー、エフ、ピアス
 ジョン、ダブリュー、サルモンド
 アーサー、ジエームス、バルフォア
 ヴイー、エス、スリニヴァサ、サストリ

施 肇 基

印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印 印

B-0033

ル點ニ於テハ、大ナル歴史的意義ヲ失ハザルモノナリ。
然レドモ國際社會ノ平和ハ現狀満足國間ノ單ナル約定ノミニテハ維持スベクモ非ズ。現狀満足諸國ガ現狀維持ヲ希望スル余リ、現狀不満足諸國ノ現狀打破運動ヲ以テ徒ニ不戰條約違反呼ハリヲナスハ決シテ社會正義ニ適ヘルモノニ非ルベシ。而シテ該條約ガ其ノ締結發言國タル米國ニ依リ殊更ニ重視セラレ、米國政府ハ武力的紛争ノ發生セル毎ニ、警告ヲ怠ラザルコトハ特ニ注目ニ價スルモノナリ。

第六 不戰條約

(一) 概 説

世界大戰後ノ平和主義、協調主義ノ時代ヲ背景トシ、米國國務長官「ケロツグ」ト佛國外相「ブリアン」ノ努力ニ依リ成立シタル「戰爭拋棄ニ關スル條約」ハ普通不戰條約ト呼バレ居ル。本條約ハ帝國ノ批准書寄託ノ日即チ昭和四年（一九二九年）七月二十四日ヨリ實施セラレ同時ニ二十五ノ原署名國及三十一ノ加入國間ニ効力ヲ發生セリ。本條約ハ締約國數ノ多キコト、然モ太平洋沿岸ノ強國全部ヲバ其ノ締約國トナシ居ルコトニ於テ太平洋ノ平和保障ニ付、政治的ニ重要ナル意義ヲ有スル如キモ、制裁規定ノ欠如ト、現今國際社會ノ發展段階ニ對スル條約規程ノ乖離トハ、本條約ヲシテ單ナル道德的義務規程ノ範圍ヲ出デザルシムルガ如シ。猶自衛權ノ留保、特定地域事項ニ對スル留保等ハ本條約ノ効力ヲシテ益々無力ナラシメツツアリ。唯世界ノ全人類ノ殆ンド大部分ガ相一致シテ戰爭拋棄ヲ決議セ

(二) 條約文

一、 戦争抛棄ニ關スル條約

千九百二十八年八月二十七日 巴里ニ於テ署名
 千九百二十九年六月二十七日 批 准
 千九百二十九年七月二十四日 批准 書 寄 託
 千九百二十九年七月二十五日 公 布

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ昭和三年八月二十七日巴里ニ於テ帝國全權
 委員ガ關係各國全權委員ト共ニ署名調印シ且第一條中ノ字句ニ關シ
 昭和四年六月二十七日附ヲ以テ帝國政府ガ宣言スル所アリタル戦争
 抛棄ニ關スル條約ヲ右帝國政府ノ宣言ヲ存シテ批准シ茲ニ右帝國政
 府ノ宣言ト共ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

昭和四年七月二十五日

内閣總理大臣 濱 口 雄 幸
 外務大臣男爵 幣 原 喜重郎

條約第一號

獨逸國大統領、亞米利加合衆國大統領、白耳義國皇帝陛下、佛蘭西
 共和國大統領、「グレート、ブリテン」「アイルランド」及「グレ
 ート、ブリテン」海外領土皇帝印度皇帝陛下、伊太利國皇帝陛下、
 日本國皇帝陛下、波蘭共和國大統領、「チェッコスロヴァキア」共
 和國大統領ハ

人類ノ福祉ヲ増進スベキ其ノ嚴肅ナル責務ヲ深ク感銘シ
 其ノ人民間ニ現在スル平和及友好ノ關係ヲ永久ナラシメンガ爲國家
 ノ政策ノ手段トシテノ戦争ヲ卒直ニ抛棄スベキ時機ノ到來セラルル
 コトヲ確信シ

其ノ相互關係ニ於ケル一切ノ變更ハ平和的手段ニ依リテノミ之ヲ求
 ムベク又平和的ニシテ秩序アル手續ノ結果タルベキコト及今後戦争
 ニ訴ヘテ國家ノ利益ヲ増進セントスル署名國ハ本條約ノ供與スル利
 益ヲ拒否セラルベキモノナルコトヲ確信シ

其ノ範例ニ促サレ世界ノ他ノ一切ノ國ガ此ノ人道的努力ニ參加シ且本條約ノ實施後遠ニ之ニ加入スルコトニ依リテ其ノ人民ヲシテ本條約ノ規定スル恩澤ニ浴セシメ、以テ國家ノ政策ノ手段トシテノ戰爭ノ共同拋棄ニ世界ノ文明諸國ヲ結合センコトヲ希望シ
茲ニ條約ヲ締結スルコトニ決シ之ガ爲左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ

獨逸國大統領

外務大臣「ドクトル、グスタフ、ストレーゼマン」

亞米利加合衆國大統領

國務長官「フランク、ビー、ケロツグ」

白耳義皇帝陛下

外務大臣國務大臣「ポール、イーマンス」

佛蘭西共和大統領

外務大臣「アリスティード、ブリアン」

「グレート、ブリテン」及「アイルランド」及「グレート、ブリテン」
海外領土皇帝印度皇帝陛下

「グレート、ブリテン」及北部「アイルランド」並ニ國際聯盟ノ
個個ノ聯盟國ニ非ザル英帝國ノ一切ノ部分

「ランカスター」公領尙書外務大臣代理「ロード、クッシュンダン」
加奈陀

總理大臣兼外務大臣「ウイリアム、ライオン、マッケンジ、キング」
「オーストラリア」聯邦

聯邦内閣員「アレクサンダー、ジョン、マックラックラン」
「ニュー、ジラランド」

「グレート、ブリテン」駐在「ニュー、ジラランド」高級委員
「サー、クリストファー、ジェームス、パール」

南阿弗利加聯邦

「グレート、ブリテン」駐在南阿弗利加聯邦高級委員「ヤコブ」

因テ各國全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之ガ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條
締約國ハ國際紛争解決ノ爲戰爭ニ訴フルコトヲ非トシ且其ノ相互關係ニ於テ國家ノ政策ノ手段トシテ戰爭ヲ拋棄スルコトヲ其ノ各自ノ人民ノ名ニ於テ嚴肅ニ宣言ス

第二條
締約國ハ相互間ニ起ルベキ一切ノ紛争又ハ紛議ハ其ノ性質又ハ起因ノ如何ヲ問ハズ平和的手段ニ依ルノ外之ガ處理又ハ解決ヲ求メザルコトヲ約ス

第三條
本條約ハ前文ニ掲ゲラルル締約國ニ依リ其ノ各自ノ憲法上ノ要件ニ從ヒ批准セラルベク且各國ノ批准書ガ總テ「ワシントン」ニ於テ寄託セラレタル後直ニ締約國間ニ實施セラルベシ

ステファヌス、スミット」
「アイルランド」自由國
内閣議長「ウイリアム、トーマス、コスグレエヴ」
印度
「ランカスター」公領尙書外務大臣代理「ロード、クツシェンダン」
伊太利皇帝陛下
佛蘭西國駐節伊太利國特命全權大使伯爵「ガエタノ、マンゾニ」
日本國皇帝陛下
樞密顧問官伯爵内田康哉
波蘭共和國大統領
外務大臣「アー、ザレスキ」
「チェッコスロヴァキア」共和國大統領
外務大臣「ドクトル、エドゥアルド、ベネシユ」

本條約ハ前項ニ定ムル所ニ依リ實施セラレタルトキハ世界ノ他ノ一
切ノ國ノ加入ノ爲必要ナル間開キ置カルベシ一國ノ加入ヲ證スル各
文書ハ「ワシントン」ニ於テ寄託セラルベク本條約ハ右寄託ノ時ヨ
リ該加入國ト本條約ノ他ノ當事國トノ間ニ實施セラレベシ
亞米利加合衆國政府ハ前文ニ掲ゲラルル各國政府及爾後本條約ニ
加入スル各國政府ニ對シ本條約及一切ノ批准書又ハ加入書ノ認證
本ヲ交付スルノ義務ヲ有ス亞米利加合衆國政府ハ各批准書又ハ加入
書ガ同國政府ニ寄託アリタルトキハ直ニ右諸國政府ニ電報ヲ以テ通
告スルノ義務ヲ有ス

右證據トシテ各全權委員ハ佛蘭西語及英吉利語ヲ以テ作成セラレ兩
本文共ニ同等ノ效力ヲ有スル本條約ニ署名調印セリ
千九百二十八年八月二十七日巴里ニ於テ作成ス

グスタフ、ストレーゼマン
フランク、ビー、ケロツグ

印 印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル日本國皇帝（御名）此ノ書ヲ

ボール、イーマンス
アリスティード、ブリアン
クツシェンダン
ダブリュー、エル、マッケンジー、キング
エー、ジェー、マックラックラン
シー、ジェーパール
ジェー、エス、スミット
リアム、テイ、マッコシユガル
クツシェンダン
ジー、マンゾニ
内田康哉
アウグスト、ザレスキー
ドクトル、エドゥアルド、ベネシユ

印 印

B-0033

0323

見ル有衆ニ宣示ス

朕昭和三年八月二十七日ニ於テ帝國全權委員ガ關係各國全權委員ト共ニ署名調印シ且第一條中ノ字句ニ關シ昭和四年六月二十七日附ヲ以テ帝國政府ガ宣言スル所アリタル戰爭拋棄ニ關スル條約ヲ閱覽點檢シ右政府ノ宣言ヲ存シテ之ヲ嘉納批准ス
神武天皇即位紀元二千五百八十九年昭和四年六月二十七日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國璽

外務大臣 男爵田 中 義 一

宣 言

帝國政府ハ千九百二十八年八月二十七日巴里ニ於テ署名セラレタル戰爭拋棄ニ關スル條約第一條中ノ「其ノ各自ノ人民ノ名ニ於テ」ナル字句ハ帝國憲法ノ條章ヨリ觀テ日本國ニ限り適用ナキモノト了解スルコトヲ宣言ス

昭和四年六月二十七日

ニ 批准書寄託

◎外務省告示第六十四號

昭和三年八月二十七日巴里ニ於テ署名セラレタル「戰爭拋棄ニ關スル條約」ニ對スル帝國ノ批准書ハ昭和四年七月二十四日「ワシントン」ニ於テ其ノ寄託ヲ了シタリ

昭和四年七月二十五日

外務大臣 男爵 幣 原 喜 重 郎

三 戰爭拋棄ニ關スル條約ノ加盟國

◎外務省告示第六十六號

昭和三年八月二十七日巴里ニ於テ署名セラレタル戰爭拋棄ニ關スル條約ハ本月二十四日帝國ノ批准書寄託ト同時ニ實施セララルニ至レ

- 印度
- 伊太利國
- 日本國
- 波蘭國
- 「チェッコスロヴァキア」國
- 二、加入國
- 「アフガニスタン」國
- 「アルバニア」國
- 奧地利國
- 「ブルガリア」國
- 支那國
- 「キェバ」國
- 丁抹國
- 「ドミニカ」國

- ルガ右實施ノ日ニ於ケル同條約ノ加盟國左ノ如シ
- 一、原署名國
- 獨逸國
- 亞米利加合衆國
- 白耳義國
- 佛蘭西國
- 英帝國
- 「グレート、ブリテン」及北部「アイルランド」並ニ國際聯盟ノ各個ノ聯盟國ニ非ザル英帝國ノ一切ノ部分
- 加奈陀
- 「オーストラリア」聯邦
- 「ニュージージーランド」
- 南阿弗利加聯邦
- 「アイルランド」自由國

B-0033

0325

- 「エジプト」國
- 「エストニア」國
- 「エテイオピア」國
- 「フィンランド」國
- 「グアテマラ」國
- 「ハンガリー」國
- 「アイスランド」國
- 「ラトヴィア」國
- 「リベリア」國
- 「リビア」國
- 和蘭國
- 「ニカラグア」國
- 諾威國
- 「パナマ」國

「ペルー」國
「ポルトガル」國
「ルーマニア」國
「ソヴィエト」社會主義共和國聯邦
「セルブ、クロアイト、スロヴェニア」王國
暹羅國
西班牙國
瑞典國
土耳其國

昭和四年七月三十一日

外務大臣 男爵 幣原喜重郎

◎外務省告示第六十七號

「ベルシヤ」國ハ昭和三年八月二十日巴里ニ於テ署名セラレタル「
戦争拋棄ニ關スル條約」ニ加入シ昭和四年七月二十五日亞米利加合

B-0033

0326

衆國政府ニ加入書ノ寄託ヲ了セリ（昭和四年七月二十九日附在本邦
亞米利加合衆國臨時代理大使通牒）

昭和四年八月二日

外務大臣 男爵 幣原 喜重郎

◎外務省告示第七十七號

希臘國ハ昭和三年八月二十七日巴里ニ於テ署名セラレタル「戰爭拋
棄ニ關スル條約」ニ加入シ昭和四年八月三日亞米利加合衆國政府ニ
加入書ノ寄託ヲ了セリ（昭和四年八月六月附在本邦亞米利加合衆國
臨時代理大使通牒）

昭和四年八月二十日

外務大臣 男爵 幣原 喜重郎

◎外務省告示第七十八號

「ホンデユラス」國ハ昭和三年八月二十七日巴里ニ於テ署名セラレ
タル「戰爭拋棄ニ關スル條約」ニ加入シ昭和四年八月五日亞米利加

合衆國政府ニ加入書ノ寄託ヲ了セリ（昭和四年八月九日附在本邦亞
米利加合衆國臨時代理大使通牒）

昭和四年八月二十日

外務大臣 男爵 幣原 喜重郎

◎外務省告示第七十九號

「チリ」國ハ昭和三年八月二十七日巴里ニ於テ署名セラレタル「戰
爭拋棄ニ關スル條約」ニ加入シ昭和四年八月十二日亞米利加合衆國
政府ニ加入書ノ寄託ヲ了セリ（昭和四年八月十四日附在本邦亞米利
加合衆國臨時代理大使通牒）

昭和四年八月二十日

外務大臣 男爵 幣原 喜重郎

◎外務省告示第八十一號

「ルクセンブルグ」國ハ昭和三年八月二十七日巴里ニ於テ署名セラ
レタル「戰爭拋棄ニ關スル條約」ニ加入シ昭和四年八月二十四日亞

米利加合衆國政府ニ加入書ノ寄託ヲ了セリ（昭和四年八月二十六日
附在本邦亞米利加合衆國臨時代理大使通牒）

昭和四年九月五日

外務大臣 男爵 幣原喜重郎

四、千九百二十八年八月二十七日巴里ニ於テ
署名セラレタル戦争拋棄ニ關スル條約第
一條中ノ字句ノ解釋ニ關スル日米間交換
覺書

千九百二十八年七月十六日在米澤田大使ヨリ「ケロ
ック」合衆國國務長官ニ交付シタル覺書譯文

不戰條約案第一條中ノ「其ノ各自ノ人民ノ名ニ於テ」ナル字句ハ「
其ノ人民ノ代理者トシテ」ノ意ニ非ズ即チ本條約ヲ締結スル者ハ人
民自身ニ非ズ又右字句ハ人民ニ對シ戦争拋棄ノ重要性ヲ印象セシム
ルノ目的ヲ以テ本條約ニ挿入セラレタルモノナリト了解ス

千九百二十八年七月十六日「ケロック」合衆國
國務長官ヨリ在米澤田代理大使ノ受領シタル覺
書譯文

本官ハ今朝日本國代理大使ヨリ覺書ヲ受領シタル右覺書ニ於テ同代
理大使ハ戦争拋棄ニ關スル條約第一條中ノ「其ノ各自ノ人民ノ名ニ
於テ」ナル字句ハ日本國皇帝陛下ガ「其ノ人民ノ代理者トシテ」署
名セララルノ意ニ非ザルモノト了解セララルベキ旨ヲ述ベタリ本官
ガ千九百二十八年七月六日日本國代理大使ニ與ヘタル覺書中ニ於テ
述ベタルガ如ク「人民ノ名ニ於テ」ナル字句ハ「人民ノ爲ニ」ナル
字句ト同意義ナリ日本國憲法ニ依レバ日本國皇帝陛下ハ自ラノ名ニ
於テ署名セラレ其ノ人民ニ代リテ署名セララルモノニ非ザルガ故ニ
日本國ニ於テハ右字句ハ如何ナル種類ノ代理ヲモ意味シ得ザルコト
極メテ明瞭ナリ本官ノ右ニ述ベタルガ如キ解釋ニ依ル日本語譯文ハ
完全ニ正確ナルベシ

第七日蘭仲裁裁判條約

(一) 概 説

世界大戰後國際紛争ヲ出來得ル限り平和的ニ解決セントノ運動熾烈トナリ、其ノ具体的方法ノ一トシテ、然モ最モ實効性ニ富メルモノトシテ選バレタルモノハ仲裁裁判ナリ。仲裁裁判ハ大戰前ニ於テモ種々ノ條約就中海牙條約ニ依リ明定セラレシモ、種々ノ留保ノ爲其ノ實益ヲ擧グルニ至ラザリキ。戰後聯盟規約第十二條、國際司法裁判所規程第三六條、「ジュネーヴ」議定書、「ロカルノ」條約、一般議定書等ノ諸條約ニ依リ仲裁裁判制度ハ益々發達シ、此等ノ諸條約ニ基キ又ハ其以外ニ於テ各國間ニ個別的ニ締結セラレタル仲裁裁判條約ハ多數ニ上リタリ。

太平洋諸國間ニ於テハ此ノ種ニ國間條約ハ比較的少數ニシテ、「ロカルノ」條約ノ如ク包括的組織ヲナスニハ至ラザルモ、尙仲裁裁判條約ノ數二十六、調停條約ノ數二十五ニ上ルト言ハレ居レリ。而シテ夫等ハ概シテ同様ナル内容ヲ有セリ。此ノ種條約ニテ帝國ノ締結セルモノトシテハ、唯日蘭間ノ司法的解決、仲裁裁判及調停條約及日瑞(西)間司法的解決條約ヲ擧ゲ得ルノミナリ。而シテ後者ノ説明ヲ省キ、前者ノ内容ヲ一瞥スルニ一定ノ紛争ヲ除ク一切ノ紛争ハ常設調停委員會ニ付託セラルベキ點ヲ主眼トシ、該付託手續及調停委員會ノ構成等ニ付規定セリ。太平洋平和保障方法ノ將來ニ對シ一ノ示唆ヲ含ムモノナリト思考セラル。

(二) 條約文

一、日本國和蘭國間司法的解決、仲裁裁判及調停條約

昭和八年(一九三三年)四月一九日「ヘーグ」ニ於テ記名

昭和一〇年(一九三五年)六月八日 批 准

昭和一〇年(一九三五年)八月一二日「ヘーグ」ニ於テ批准書交換

昭和一〇年(一九三五年)八月一三日 公 布

日本國皇帝陛下

及

和蘭國皇帝陛下ハ

日本國和蘭國間ノ永年ノ友好關係ヲ鞏固ナラシムルノ希望ニ均シク
促サレ

兩國間ニ生スルコトアルヘキ紛争ハ其ノ性質ノ如何ヲ問ハス之カ解
決ヲ如何ナル場合ニ於テモ平和的手段ノ外ニ求メサルコトヲ固ク決
意シ

之カ爲條約ヲ締結スルコトニ決シ左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ

日本國皇帝陛下

和蘭國駐劄特命全權公使齋藤博

和蘭國皇帝陛下

外務大臣「ヨンクヘール、フランス、ペーラー、ルツ、ファン、
ブロックラント」

右全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認めタ
ル後左ノ諸規定ヲ協定セリ

第一條

締約國間ニ生シ且通常ノ外交手續ニ依リ相當ノ期間内ニ解決セラレ
得サルコトアルヘキ一切ノ紛争ハ其ノ性質ノ如何ヲ問ハス本條約ノ
規定ニ從ヒテ設置セラレ且活動スル常設調停委員會ニ締約國間ノ合
意ニ依リ又ハ其ノ一方ノ請求ニ依リ付託セララルヘシ兩締約國ニ於テ
法律的ノモノナルヘシト認めタル紛争ハ締約國間ノ合意ニ依ルノ外
常設調停委員會ニ付託セラレサルヘシ

第二條

紛争ニシテ其ノ解決ニ關シ特別ノ手續カ締約國間ニ實施中ノ他ノ條約ニ依リ定メラルルモノハ右條約ノ規定ニ從ヒ解決セララルヘシ

第三條

法律的紛争特ニ締約國間ニ實施中ノ條約ノ解釋ニ關スル紛争ニシテ常設調停委員會ニ付託セラレサルカ又ハ之ニ付託セラレタルモ其ノ報告ノ作成後三月内ニ解決セラレサルモノハ締約國ノ一方ニ依リ他方ニ對シ爲サルル請求ニ基キ特別取極ノ方法ニ依ル合意ヲ以テ常設國際司法裁判所又ハ仲裁裁判所ニ付託セラルヘシ常設國際司法裁判所ハ其ノ規程ニ依リ定メラルル條件及手續ニ從ヒ裁判スヘク又仲裁裁判所ハ國際紛争ノ平和的處理ニ關スル千九百七年十月十八日ノ「ヘーグ」條約ニ依リ定メラルル條件及手續ニ從ヒ裁判スヘシ特別取極ハ締約國政府間ニ於ケル文書ノ交換ニ依リ設定セラルルモノトス締約國ノ一方ニ依リ他方ニ對シ爲サルル常設國際司法裁判所又ハ仲

裁裁判所ニ紛争ヲ付託スルノ提議ノトキヨリ三月ノ期間内ニ管轄裁判所ノ選擇ニ關シ締約國間ニ意見一致セサルトキハ紛争ハ前項ニ定メラルル手續ニ從ヒ右司法裁判所ニ付託セラルヘク該裁判所ハ其ノ規程ニ依リ定メラルル條件及手續ニ從ヒ裁判スヘシ紛争ハ締約國カ之ヲ仲裁裁判所ニ付託スルコトニ意見一致シタルモ次條ノ規定ニ依ル右裁判所ノ設置カ同條第二項ニ掲ケラルル請求ノトキヨリ五月内ニ爲サレサリシトキハ同一ノ手續ニ從ヒ均シク常設國際司法裁判所ニ付託セラルヘシ

第四條

締約國カ紛争ヲ仲裁裁判所ニ付託スルコトニ意見一致シタルトキハ右裁判所ハ別段ノ了解ナキ限り五名ノ裁判官ヲ以テ構成セラレ且次ノ方法ニ依リ設置セララルヘシ即チ締約國ハ其ノ國民中ヨリ選定セラレ得ヘキ一名ノ仲裁裁判官ヲ各任命スヘク又裁判長及他ノ二名ノ仲裁裁判官ハ第三國ノ國民中ヨリ合意ニ依リ選定セラルヘシ右三名ノ

- 仲裁裁判官ハ各異リタル國籍ヲ有スヘシ
- 締約國ノ一方ニ依リ他方ニ對シ爲サルル仲裁裁判所ヲ共同シテ設置スルコトノ請求ノトキヨリ三月ノ期間内ニ仲裁裁判所ノ裁判官ノ任命カ行ハレサルトキハ必要ナル任命ヲ爲スノ手配ハ締約國カ合意ヲ以テ選定スル第三國ニ委嘱セラルヘシ
- 右ニ關シ合意成立セサルトキハ各締約國ハ異リタル一國ヲ指定スヘク又任命ハ斯ク選定セラレタル國ニ依リ協同シテ爲サルヘシ
- 第五條
- 死亡、辭任又ハ他ノ何等カノ故障ニ依リ仲裁裁判所ニ生スルコトアルヘキ闕員ハ任命ニ關シ第四條ニ定メラルル方法ニ從ヒ最短キ期間内ニ補充セラルヘシ
- 第六條
- 第四條ニ揭ケラルル仲裁裁判ハ第七條、第八條及第九條ノ規定ニ依リ規律セラルヘシ
- 第七條
- 締約國ハ紛争ノ目的及準據手續ヲ決定スル特別取極ヲ作成スヘシ
- 特別取極ニ於テ充分ナル指示又ハ明示ナキトキハ仲裁手續ハ國際紛争ノ平和的處理ニ關スル千九百七年十月十八日ノ「ヘーグ」條約ノ規定ニ依リ處理セラルヘシ
- 第八條
- 仲裁裁判官ニ依リ適用セラルヘキ實體法則ニ關シ別段ノ了解ナキトキハ仲裁裁判所ハ左記ニ基キ其ノ決定ヲ爲スヘシ
- 一 兩締約國間ニ實施中ノ一般又ハ特別ノ條約及之ニ由來スル法的規則
- 二 法トシテ承認セラレタル一般的慣行ノ表現ト認メラルル國際的慣習
- 三 文明國ニ依リ認メラレタル法的一般原則
- 四 法的規則決定ノ補助手段トシテノ最權威アル學說及判例ノ歸結

- 仲裁裁判官ハ各異リタル國籍ヲ有スヘシ
- 締約國ノ一方ニ依リ他方ニ對シ爲サルル仲裁裁判所ヲ共同シテ設置スルコトノ請求ノトキヨリ三月ノ期間内ニ仲裁裁判所ノ裁判官ノ任命カ行ハレサルトキハ必要ナル任命ヲ爲スノ手配ハ締約國カ合意ヲ以テ選定スル第三國ニ委嘱セラルヘシ
- 右ニ關シ合意成立セサルトキハ各締約國ハ異リタル一國ヲ指定スヘク又任命ハ斯ク選定セラレタル國ニ依リ協同シテ爲サルヘシ
- 第五條
- 死亡、辭任又ハ他ノ何等カノ故障ニ依リ仲裁裁判所ニ生スルコトアルヘキ闕員ハ任命ニ關シ第四條ニ定メラルル方法ニ從ヒ最短キ期間内ニ補充セラルヘシ
- 第六條
- 第四條ニ揭ケラルル仲裁裁判ハ第七條、第八條及第九條ノ規定ニ依リ規律セラルヘシ

第九條

仲裁判決ノ再審ノ請求ハ仲裁裁判ノ特別取極ニ反對ノ規定ナキ限り
裁判所ニ依リ定メラルヘキ期間内ニ國際紛争ノ平和的處理ニ關スル
千九百七年十月十八日ノ「ヘーグ」條約第八十三條第二項及第三項
ノ規定ニ從ヒ受理セラルヘシ

第十條

紛争ニシテ其ノ目的カ締約國ノ一方ノ國內法制ニ依レハ該締約國ノ
內國裁判所ノ管轄ニ屬スルモノニ付テハ該紛争ハ既判力ヲ有シ且相
當ノ期間内ニ權限アル內國裁判官憲ニ依リ言渡サレタル判決ノ後ニ
非サレハ本條約ニ依リ定メラルル手續ニ付託セラルルコトヲ得ス

第十一條

本條約ニ依リ定メラルル常設調停委員會ハ次ノ方法ニ依リ指名セラ
ルヘキ五名ノ委員ヲ以テ構成セラルヘシ即チ締約國ハ各自ノ國民中
ヨリ一名ノ委員ヲ各任命スヘク且第三國ノ國民中ヨリ他ノ三名ノ委

員ヲ合意ニ依リ指名スヘシ右三名ノ委員ハ各異リタル國籍ヲ有スヘ
ク且其ノ中ヨリ締約國ハ委員會ノ議長ヲ指名スヘシ
委員ノ任期ハ本條約ノ實施ノ日ヨリ五年トシ其ノ委任ハ更新セラル
ルコトヲ得右委員ハ其ノ更新ニ致ル迄又一切ノ場合ニ於テ其ノ委任
ノ滿期ノ際ニ進行中ナル事業ノ完了ニ至ル迄職務ニ留ルヘシ
死亡、辭任又ハ永久的若ハ一時的ノ故障ニ因リ生スルコトアルヘキ
關員ハ任命ニ付定メラレタル方法ニ從ヒ成ルヘク速ニ且三月ヲ超エ
サル期間内ニ補充セラルヘシ斯ク指命セラレタル者ノ任期ハ其ノ前
任者ノ未了委任期間ノミタルヘシ

第十二條

常設調停委員會ハ本條約ノ批准書ノ交換後成ルヘク速ニ設置セラ
ルヘシ

共同シテ指名セラルヘキ委員ノ任命カ條約ノ批准書ノ交換後六月内
ニ行ハレサルカ又ハ補闕ノ場合ニ於テ關員ノ生シタルトキヨリ三月

内ニ行ハレサルトキハ常設國際司法裁判所長ハ別段ノ了解ナキ限り
 兩締約國ニ依リ共同シテ又ハ其ノ一方ニ依リ必要ナル指名ヲ爲スコ
 トヲ求メラルヘシ裁判所長ニ故障アルカ又ハ裁判所長カ締約國ノ一
 方ノ國民ナルトキハ裁判所次長ハ右指名ヲ爲スコトヲ求メラルヘシ
 裁判所次長ニ故障アルカ又ハ裁判所次長カ締約國ノ一方ノ國民ナル
 トキハ裁判所ノ名簿ノ順位ニ依リ他ノ裁判官中ノ首席タル者ニシテ
 何レノ締約國ノ國民ニモ非サルモノカ右指名ヲ爲スコトヲ求メラル
 ヘシ

第十三條

常設調停委員會ハ議長ニ宛テラルル請求ノ方法ニ依リ事件ノ付託ヲ
 受タヘシ

請求ニハ紛争ノ目的ヲ簡單ニ敘述シタル後調停ニ達スルニ適當ナ
 ル一切ノ措置ヲ執ルヘキ旨ノ委員會ニ對スル要請ヲ包含セシムヘシ
 請求カ締約國ノ一方ノミヨリ提出セラルルトキハ該請求ハ右締約國

ニ依リ相手方締約國ニ遲滯ナク通告セラルヘシ

第十四條

常設調停委員會ハ係争問題ヲ明ニシ、之カ爲審査又ハ他ノ方法ニ依
 リ一切ノ有用ナル情報ヲ蒐集シ且締約國ヲ調停スルニ努ムルコトヲ
 任務トスヘシ右委員會ハ事件ノ審理ノ後其ノ適當ト認ムル和解ノ條
 件ヲ締約國ニ呈示シ且必要アルトキハ締約國ニ其ノ意見ヲ開陳スル
 爲ノ猶豫ヲ與フルコトヲ得

委員會ハ其ノ事業ノ終了ニ當リ該事業ノ結果ヲ記載セル報告書ヲ作
 成スヘク、該報告書ハ一通ツツ各締約國ニ交付セラルヘシ報告書ニ
 ハ委員會ノ決定カ全會一致ニ依リ爲サレタリヤ又ハ過半数ニ依リ爲
 サレタリヤハ之ヲ記載セサルヘシ

締約國ハ委員會ノ採用セル事實上、法律上其ノ他ノ判断ニ何等羈束
 セラルルコトナカルヘシ

委員會ノ事業ハ委員會カ紛争ノ付託ヲ受ケタル日ヨリ遅クトモ二月

内ニ開始セラルヘシ締約國カ別段ノ協定ヲ爲サザルコト又ハ委員會カ期間ヲ延長スルコトヲ必要ト認メサル限り右事業ハ委員會カ開始ヲ宣シタル日ヨリ六月ノ期間内ニ終了セラルヘシ委員會ハ六月ノ期間ヲ超エテ其ノ事業ヲ繼續スルコトヲ必要ト認ムルトキハ其ノ理由ヲ兩締約國ニ通報スヘシ

第十五條

常設調停委員會ハ反對ノ特別規定ナキ限り自ラ其ノ手續ヲ決定スヘク右手續ハ何レノ場合ニ於テモ對審的タルヘシ審査ニ關シテハ委員會ハ其ノ全會一致ヲ以テ別段ノ決定ヲ爲ササルトキハ國際紛争ノ平和的處理ニ關スル千九百七年十月十八日ノ「ヘーグ」條約第三章（國際審査委員會）ノ規定ニ從フヘシ

第十六條

議長ハ常設調停委員會カ紛争ノ付託ヲ受ケタル後成ルヘク速ニ該委員會ヲ招集スヘシ

委員會ハ締約國間ニ反對ノ合意ナキ限り其ノ議長ニ依リ指定セララル地及日ニ會合スヘシ

第十七條

常設調停委員會ノ事業ハ委員會カ締約國ノ同意ヲ得テ爲ス決定ニ基クノ外公開セララルコトナシ
締約國ハ豫メ協議ヲ爲スニ非サレハ委員會ノ事業ノ結果ヲ公表セサルコトヲ約ス

第十八條

締約國ハ締約國ト常設調停委員會トノ間ノ仲介者タルノ任務ヲ有スル代理人ニ依リ該委員會ニ代表セララルヘシ尙締約國ハ其ノ特ニ任命スル補佐人及専門家ノ援助ヲ受クルコト竝ニ何人タルヲ問ハス其ノ本國政府ノ同意ヲ得テ之ヲ出頭セシムルコトヲ有用ト認ムヘキモノニ對シ口頭説明ヲ請求スルノ權能ヲ有スヘシ

第十九條

常設調停委員會ノ決定ハ本條約ニ反對ノ規定ナキ限り表決ノ過半数ニ依リ爲サルヘシ
委員會ハ一切ノ委員カ正當ニ招集セラレ且少クトモ共同シテ選任セラレタル一切ノ委員カ出席スルニ非サレハ紛争ノ實體ニ關スル決定ヲ爲スコトヲ得ス

第二十條

締約國ハ常設調停委員會ノ事業ヲ容易ナラシメ殊ニ自國ノ權限アル官憲ノ援助ヲ委員會ニ對シ保障シ、有用ナル書類及情報ヲ能フ限り多ク委員會ニ供給シ且委員會ヲシテ證人又ハ鑑定人ノ召喚及訊問並ニ臨檢ヲ自國ノ領域内ニ於テ爲スコトヲ得シムル爲ニ必要ナル措置ヲ執ルコトヲ約ス

第二十一條

常設調停委員會ノ事業ノ繼續中ハ各委員ハ締約國間ノ合意ニ依リ決定セララルル額ノ手當ヲ受クヘク締約國ハ各之ヲ均等ニ分擔スヘシ

委員會ノ活動ニ依リ生シタル全般ノ費用ハ半額ツツ割當テラルヘシ

第二十二條

仲裁裁判所又ハ常設國際司法裁判所ノ決定ハ締約國ニ依リ誠實ニ執行セララルヘシ

締約國ハ常設調停委員會、仲裁裁判所又ハ常設國際司法裁判所ノ手續ノ繼續中ハ常設調停委員會ノ提案ノ受諾ニ對シ又ハ仲裁裁判所若ハ常設國際司法裁判所ノ決定ノ執行ニ對シ不利ナル影響ヲ與フルコトアルヘキ何等ノ措置ヲモ執ラサルコトヲ約ス仲裁裁判所ハ締約國カ行政的手段ニ依リ執リ得ルモノナル限り締約國ノ一方ノ請求ニ依リ假措置ヲ命スルコトヲ得常設調停委員會モ同一ノ目的ヲ以テ提案ヲ爲スコトヲ得常設國際司法裁判所ニ關シテハ其ノ規程カ適用セララルヘシ

第二十三條

本條約ノ解釋ニ關シ何等カノ紛争カ締約國間ニ生スルニ至リタルト

キハ右紛争ハ第三條ニ規定セラルル手續ニ従ヒ解決セラルヘシ

第二十四條

本條約ハ批准セラルヘシ批准書ハ成ルヘク速ニ「ヘーグ」ニ於テ交換セラルヘシ

第二十五條

本條約ハ批准書交換ノトキヨリ實施セラルヘク且其ノ實施ノトキヨリ五年ノ存續期間ヲ有スヘシ
本條約ハ右期間ノ滿了ノ六月前ニ廢棄セラレサルトキハ更ニ五年ノ期間ニ付暗黙ニ更新セラレタルモノト認メラルヘク且爾後モ同様タルヘシ

本條約ノ期間滿了ニ當リ本條約ニ依ル何等カノ手續カ常設調停委員會、常設國際司法裁判所又ハ仲裁裁判所ニ繫屬中ナルトキハ右手續ハ其ノ完了ニ至ル迄續行セラルヘシ
右證據トシテ前記全權委員ハ本條約ニ署名調印セリ

昭和八年四月十九日即チ千九百三十三年四月十九日「ヘーグ」ニ於テ本書ニ通ヲ作成ス

齋 藤 博 印

「ベールツ、ファン、
ブロックラント」 印

B-0033

0333

ニ署名議定書

昭和八年(一九三三年)四月一九日「ヘーグ」ニ於テ記名
昭和一〇年(一九三五年)八月一三日 公 布

日本國和蘭國間司法的解決、仲裁裁判及調停條約ノ署名ヲ爲スニ當
リ下名ノ全權委員ハ左記ニ付意見一致ナル旨ヲ宣言セリ

- 一 前記條約ハ兩國間ニ生スルコトアルヘキ一切ノ紛争ニシテ第三
國ノ利益ニ直接關係スルコトナカルヘキモノニ適用セラルヘシ
- 二 千九百三十三年三月二十七日ニ豫告セラレタル日本國ノ國際聯
盟脫退ノ實現ニ依リ常設國際司法裁判所ニ對スル日本國ノ法律的
地位ニ變化ノ生スルコトアルヘキ場合ニハ締約國ハ日本政府ノ
請求ニ依リ前記條約ノ規定ニシテ右裁判所ニ關係アルモノヲ變更
スルノ必要アリヤ否ヤヲ審査スル爲商議ヲ開始スヘシ右商議中前
記規定ノ適用ハ停止セラルヘシ尤モ日本國政府カ前記請求ヲ爲シ
タル際ニ常設國際司法裁判所ニ繫屬中ナル手續ハ其ノ完了ニ至ル

迄續行セラルヘク又前記條約ノ規定ハ此等ノ場合ニ右裁判所ノ決
定ニ引續キ適用セラルヘシ

昭和八年四月十九日即チ千九百三十三年四月十九日「ヘーグ」ニ於
テ

齋 藤 博

「ペーラールツ、ファン
ブロックラント」

B-0033

0338

日本國及瑞西國間司法的解決條約

大正一三年(一九二四年)二月二十六日東京ニ於テ署名調印
 大正一四年(一九二五年)二月十九日批准
 大正一四年(一九二五年)二月十九日東京ニ於テ批准書交換
 大正一四年(一九二五年)二月十九日公布

日本國皇帝陛下及

瑞西聯邦政府ハ

日本國及瑞西國ヲ聯結スル友好關係ヲ鞏固ニシ且兩國間ニ生スルコトアルヘキ紛争ニシテ司法的解決ニ付シ得ト認メラルモノヲ能ク限リ司法的解決方法ニ依リ解決セムトスルノ希望ニ促サレ國際聯盟規約第十三條ノ精神ニ基キ之カ爲條約ヲ締結スルコトニ決シ左ノ如ク各其ノ全權委員ヲ任命セリ

日本國皇帝陛下

外務大臣從三位勳一等男爵幣原喜重郎

瑞西聯邦政府

日本國駐劄瑞西國代理公使「アルフレード、ブルンネル」

因テ各全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

法律的紛争ニシテ兩締約國間ニ生スルコトアルヘク且外交手段又ハ一切ノ他ノ調停ノ方法ニ依リ解決スルコト能ハサルモノハ司法的解決ニ付セラルヘシ

尤モ各締約國ハ一切ノ紛争ニシテ自國ノ緊切ナル利益、自國ノ獨立若ハ自國ノ名譽ニ關シ又ハ第三國ノ利益ニ關係アリト各自ノ認メタルモノヲ司法的解決ニ付セサルノ自由ヲ保有スヘシ

第二條

本條約ニ從ヒ司法的解決ニ付セラルヘキ紛争ハ常設國際司法裁判所ニ付セラルヘシ

兩締約國ハ紛争ヲ常設國際司法裁判所ノ簡易手續部ニ付スルコトヲ各特別ノ場合ニ於テ協定スルコトヲ得
 兩締約國ハ又紛争ヲ合意ニ依リ構成セラルル仲裁裁判所ニ付スルコトヲ協定スルヲ得此ノ場合ニ於テ且反對ノ條約ナキ限り本條約ノ規定ハ仲裁手續ニ準用セラルヘシ

第三條

各特別ノ場合ニ於テ兩締約國ハ常設國際司法裁判所ニ訴フルニ先チ常設國際司法裁判所規程及規則ノ規定ニ從ヒ紛争ノ目的、裁判所ニ付與セラルルコトアルヘキ特別權限及兩國間ニ定メラルヘキ一切ノ他ノ條件ヲ明白ニ確定スル特別合意ヲ設定スヘシ
 右特別合意ハ兩締約國政府間ニ於ケル文書ノ交換ニ依リ設定セラルルモノトス
 右特別合意ハ一切ノ點ニ付常設國際司法裁判所ニ依リ解釋セラルルモノトス

第四條

常設國際司法裁判所ノ爲シタル判決ハ兩締約國ニ依リ善意ヲ以テ執行セラルルコトヲ要ス
 兩締約國ハ常設國際司法裁判所ニ依リ爲サル判決ノ執行ニ對シ支障ト爲ルヘキ影響ヲ與フルコトアルヘキ一切ノ措置ヲ司法手續ノ進行中能フ限り爲ササルヘシ

第五條

本條約ハ批准セラルヘシ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換セラ
 ルヘシ
 本條約ハ批准書交換後五年間効力ヲ有スルモノトス本條約ハ右期間満了ノ六月前ニ廢棄セラレサルトキハ兩締約國ノ何レカノ一方ヨリ他方ニ對シ之カ廢棄ノ意思ヲ通告シタル時ヨリ起算シ一年ノ期間ノ満了ニ至ル迄効力ヲ存續スヘシ
 右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名調印セリ

千九百二十四年十二月二十六日東京ニ於テ本書ニ通ヲ作ル

幣 原 喜 重 郎

「アー、ブルンネル」

Ⓔ Ⓔ

第二編 我國ヲ當事國セル太平洋平和保障ニ
關セル過去ノ條約及協定

B-0033

034:

第一 日英同盟協約
 (一) 概 説

第十九世紀末迄「名譽アル孤立」ニ甘ンジタル英國ハ歐洲國際情勢ノ推移ヨリ、第二十世紀初頭ニ於テ其ノ傳)統的政策ヲ拋棄セザルヲ得ザル運命ニ至レリ。而シテ英國ハ最初獨逸ト結バント計リタレドモ果サザリキ。當時露國ハ極東ニ於テ侵略行爲ヲ逞シウシ殊ニ滿洲ニ於ケル活動ハ活潑ヲ極メタルヲ以テ、帝國ノ國防ハ著シク脅威ヲ蒙レリ。極東ヨリ露國ノ勢力ヲ可及的ニ驅逐スルハ英國ノ利益ニモ合致セルヲ以テ前述ノ英國側ノ氣運ト東亞ノ此ノ情勢トハ相合シ帝國内ニ相當有力ナリシ親露論ヲ壓シテ、此處ニ日英同盟ノ成立ヲ見ルニ至レリ。

該同盟條約ニ依ル英國ノ援護ノ下ニ帝國ハ露國ヲ破リ、極東及西太平洋ニ於ケル安定勢力タル地步ヲ克チ得タル事ハ周知ノ如シ。而シテ第一回同盟協約ハ其ノ有効期限ヲ五箇年トナシタルガ該條約有效

期間内ニ於テ日露戰爭ノ勃發ヲ見タルヲ以テ、更ニ第二回ノ同盟協約ニ依リ日英同盟ヲ更ニ強化セシメタリ。
 第二回日英同盟ト第一回ノソレトヲ比較スルニ、第一回日英同盟ニ於テハ日本ガ露國及其ノ同盟國ノ聯合ニ依リ屈服セシメラルコトヲ阻止スル點ヲ主眼トシタリ。然ルニ第二回日英同盟ノ主タル目的ハ露國ヲシテ將來印度及東亞ニ對スル侵略政策ノ望ヲ絶タシメ、又斯クスル事ニ依リ、其ノ注意ヲ歐洲ニ轉ゼシメ遂ニハ同盟國側ト協力セシムベク導ク點ニ存シタリ。英國ハ日本ノ朝鮮ニ對スル完全ナル行動ノ自由ヲ認メ、ソレガ代償トシテ英國ノ印度國境ニ對スル特殊利益ヲ承認セシメ且之ガ防禦ノ義務ヲ負ハシメタリ。斯クテ該同盟ハ陸軍力劣勢ナル英國ニ取リ絶大ナル利益トナリタリ。其ノ有効期限ニ關シ第一回同盟協約ト同一ノ自動的延長ニ關スル規定ヲ有スルニ不拘、第一回ノ有効期限五年ナルニ對シ第二回ノソレハ十年トナリタルハ兩國間ノ増大セル友誼ヲ表現セルモノナリ。

日英同盟ハ斯クテ一九〇五年頃英國ニ於テ最高潮ノ人氣ヲ博シタルモ、一九〇七年日露協商並英露協商ノ成立以後ハ同盟ノ假想激ヲ失ヒ之ニ加フルニ日米間ノ緊張、之ニ伴ヘル英各自治領ノ排日親米の傾向及支那ニ於ケル投資並貿易上ニ於ケル利害ノ衝突ハ最早同盟ヲシテ昔日ノ人氣ナカラシムルニ至リタリ。然レドモ英國政府ハ主トシテ其ノ對獨政策上該同盟ヲ依然繼續セントノ決意ヲ有シタリ。一方日本政府ニ於テモ、支那ノ動亂化ニ基ク露國ノ北滿占領ノ野心ヲ警戒シ同盟ノ維持ヲ希望シ居タリ。

日英兩國政府ノ斯カル希望ハ、英米仲裁條約ノ内讒ヲ契機トシ、第三回日英同盟協約ノ締結ニ導キタリ。第三回日英同盟協約ニ於テハ對米關係ノ顧慮上ヨリ、日米相戰フ場合ニ於ケル英國ノ參戰義務ヲ免除シタリ。斯クテ前述ノ國際情勢ノ變化ト共ニ同盟ノ基調ニ變化ヲ來シタルハ當然ニシテ、遂ニ大戰後ノ華盛頓會議ニ於テ成立セル四國條約ニ依リ日英同盟協約ノ廢止ヲ見ルニ至レリ。

(二) 條約文

一、第一回日英同盟協約

明治三十五年一月三十日倫敦ニ於テ調印(英文)
同 年二月十二日官 報 掲 載

日本國政府及大不列顛國政府ハ偏ニ極東ニ於テ現狀及全局ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ且ツ清帝國及韓帝國ノ獨立ト領土保全トヲ維持スルコト及該二國ニ於テ各國ノ商工業ヲシテ均等ノ機會ヲ得セシムルコトニ關シ特ニ利益關係ヲ有スルヲ以テ茲ニ左ノ如ク約定セリ

第一條

兩締約國ハ相互ニ清國及韓國ノ獨立ヲ承認シタルヲ以テ該二國孰レニ於テモ全然侵略的趨向ニ制セララルコトナキヲ聲明ス然レトモ兩締約國ノ特別ナル利益ニ鑑ミ即チ其利益タル大不列顛國ニ取リテハ主トシテ清國ニ關シ又日本國ニ取リテハ其清國ニ於テ有スル利益ニ加フルニ韓國ニ於テ政治上並ニ商業上及工業上格段ニ利益ヲ有スル

ヲ以テ兩締約國ハ若シ右等利益ニシテ別國ノ侵略的行動ニ因リ若クハ清國又ハ韓國ニ於テ兩締約國孰レカ其臣民ノ生命及財産ヲ保護スル爲メ干渉ヲ要スヘキ騒動ノ發生ニ因リテ侵迫セラレタル場合ニハ兩締約國孰レモ該利益ヲ擁護スル爲メ必要缺クヘカラサル措置ヲ執リ得ヘキコトヲ承認ス

第二條

若シ日本國又ハ大不列顛國ノ一方カ上記各自ノ利益ヲ防護スル上ニ於テ別國ト戰端ヲ開クニ至リタル時ハ他ノ一方ノ締約國ハ嚴正中立ヲ守リ併セテ其同盟國ニ對シテ他國カ交戦ニ加ハルヲ妨クルコトニ努ムヘシ

第三條

上記ノ場合ニ於テ若シ他ノ一國又ハ數國カ該同盟國ニ對シテ交戦ニ加ハル時ハ他ノ締約國ハ來リテ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當ルヘシ講和モ亦該同盟國ト相互合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第四條

兩締約國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經スシテ他國ト上記ノ利益ヲ害スヘキ別約ヲ爲ササルヘキコトヲ約定ス

第五條

日本國若ハ大不列顛國ニ於テ上記ノ利益カ危殆ニ迫レリト認ムル時ハ兩國政府ハ相互ニ充分ニ且ツ隔意ナク通告スヘシ

第六條

本協約ハ調印ノ日ヨリ直ニ實施シ該期日ヨリ五箇年間效力ヲ有スルモノトス若シ右五箇年ノ終了ニ至ル十二箇月前ニ締約國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢止スルノ意思ヲ通告セサル時ハ本協約ハ締約國ノ一方カ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一箇年ノ終了ニ至ル迄ハ引續キ效力ヲ有スルモノトス然レトモ右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方カ現ニ交戦中ナル時ハ本同盟ハ講和結了ニ至ル迄當然繼續スルモノトス右證據トシテ下名ハ各其政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ之ニ記名調印ス

ルモノナリ

一千九百二年一月三十日龍動ニ於テ本書ニ通ヲ作ル

大不列顛國駐劄日本國皇
帝陛下ノ特命全權公使 林 董

大不列顛皇 帝陛下ノ
外務 大臣 ランスダウン

ニ第二回日英同盟協約

明治卅八年八月十二日倫敦ニ於テ調印 (英文)
同 年九月廿七日官 製 掲 載

協約前文

日本國政府及大不列顛國政府ハ一千九百二年一月三十日兩國政府間
ニ締結セル協約ニ代フルニ新約款ヲ以テセムコトヲ希望シ

(イ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル全局ノ平和ヲ確保スルコト

(ロ) 清帝國ノ獨立及領土保全並清國ニ於ケル列國ノ商工業ニ對
スル機會均等主義ヲ確實ニシ以テ清國ニ於ケル列國ノ共通
利益ヲ維持スルコト

(ハ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル兩締盟國ノ領土權ヲ保持シ並該
地域ニ於ケル兩締盟國ノ特殊利益ヲ防護スルコト
ヲ目的トスル左ノ各條ヲ約定セリ

第一條

B-0033

0345

日本國又ハ大不列顛國ニ於テ本條約前文ニ記述セル權利及利益ノ中何レカ危殆ニ迫ルモノアルヲ認ムルトキハ兩國政府ハ相互ニ充分ニ且隔意ナク通告シ其ノ侵迫セラレタル權利又ハ利益ヲ擁護セムカ爲ニ執ルヘキ措置ヲ協同ニ考慮スヘシ

第二條

兩締盟國ノ一方カ挑發スルコトナクシテ一國若ハ數國ヨリ攻撃ヲ受ケタルニ因リ又ハ一國若ハ數國ノ侵略的行動ニ因リ該締盟國ニ於テ本條約前文ニ記述セル其ノ領土權又ハ特殊利益ヲ防護セムカ爲交戦スルニ至リタルトキハ前記ノ攻撃又ハ侵略的行動カ何レノ地ニ於テ發生スルヲ問ハス他ノ一方ノ締盟國ハ直ニ來リテ其ノ同盟國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ講和モ亦雙方合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三條

日本國ハ韓國ニ於テ政治上、軍事上及經濟上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルヲ以テ大不列顛國ハ日本國カ該利益ヲ擁護増進セムカ爲正當且必

要ト認ムル指導、管理及保護ノ措置ヲ韓國ニ於テ執ルノ權利ヲ認承ス但シ該措置ハ常ニ列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ニ反セサルコトヲ要ス

第四條

大不列顛國ハ印度國境ノ安全ニ繫ル一切ノ事項ニ關シ特殊利益ヲ有スルヲ以テ日本國ハ前記國境ノ附近ニ於テ大不列顛國カ其ノ印度領地ヲ擁護セムカ爲必要ト認ムル措置ヲ執ルノ權利ヲ承認ス

第五條

兩締盟國ハ執レモ他ノ一方ト協議ヲ經スシテ他國ト本條約前文ニ記述セル目的ヲ害スヘキ別約ヲ爲ササルヘキコトヲ約定ス

第六條

現時ノ日露戰爭ニ對シテハ大不列顛國ハ引續キ嚴正中立ヲ維持シ若シ他ノ一國若ハ數國カ日本國ニ對シ交戦ニ加ハルトキハ大不列顛國ハ來リテ日本國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ講和モ亦雙方同意ノ上

ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第七條

兩締約國ノ一方カ本協約中ニ規定スル場合ニ際シ他ノ一方ニ兵力的
援助ヲ與フヘキ條件及該援助ノ實行方法ハ兩締約國陸海軍當局者ニ
於テ協定スヘク又該當局者ハ相互利害ノ問題ニ關シ相互ニ充分ニ且
隔意ナク隨時協議スヘシ

第八條

本協約ハ第六條ノ規定ト牴觸セサル限り調印ノ日ヨリ直ニ實施シ十
箇年間效力ヲ有ス右十箇年ノ終了ニ至ル十二箇月前ニ兩締盟國ノ孰
レヨリモ本協約ヲ廢棄スルノ意思ヲ通告セサルトキハ本協約ハ兩締
盟國一方カ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一箇年ノ終了ニ至ルマ
テ引續キ效力ヲ有ス然レトモ若シ右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方カ
現ニ交戰中ナルトキハ本同盟ハ講和ノ成立ニ至ルマテ當然繼續スヘ
シ

右證據トシテ下名ハ各其ノ政府ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スル
モノナリ

一千九百五年八月十二日倫敦ニ於テ本書二通ヲ作ル

大不列顛國駐劄日本國皇 林 董 ④

帝陛下ノ特命全權公使 林 董 ④

大不列顛國皇帝陛下ノ外務大臣 ランスダウン ④

B-0033

0347

第三條

日本國又ハ大不列顛國ニ於テ本協約前文ニ記述セル權利及利益ノ中何レカ危殆ニ迫ルモノアルヲ認ムルトキハ兩國政府ハ相互ニ充分ニ且隔意ナク通告シ其ノ侵迫セラレタル權利又ハ利益ヲ保護セムカ爲ニ孰ルヘキ措置ヲ協同ニ考量スヘシ

第二條

兩締約國ノ一方カ洩發スルコトナクシテ一國若ハ數國ヨリ攻擧ヲ受ケタルニ依リ又ハ一國若ハ數國ノ侵略的行動ニヨリ該締盟國ニ於テ本協約前文ニ記述セル其ノ領土權又ハ特殊利益ヲ防護セムカ爲交戦スルニ至リタル時ハ前記ノ攻擧又ハ侵略的行動カ何レノ地ニ於テ發生スルヲ問ハス他ノ一方ノ締盟國ハ直ニ來リテ其ノ同盟國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ講和モ亦雙方合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三條

第三回日英同盟協約

明治四十四年七月十三日倫敦ニ於テ調印（英文）
同 年同月十五日官報 掲 載

協約前文

日本國政府及大不列顛國政府ハ千九百五年八月十二日ノ日英協約締結以來事態ニ重大ナル變遷アリタルニ願ミ該協約ヲ改訂シ以テ其ノ變遷ニ適應セシムルハ全局ノ靜寧安固ニ資スヘキコトヲ信シ前記協約ニ代ハリ之ト同シク

- (イ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル全局ノ平和ヲ確保スルコト
- (ロ) 清帝國ノ獨立及領土保全竝清國ニ於ケル列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ヲ確實ニシ以テ清國ニ於ケル列國ノ共通利益ヲ維持スルコト
- (ハ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル兩締盟國ノ領土權ヲ保持シ該地域ニ於ケル兩締盟國ノ特殊利益ヲ防護スルコトヲ目的ト

B-0033

0348

兩締約國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經スシテ他國ト本協約前文ニ記述セル目的ヲ害スヘキ別約ヲ爲ササルヘキコトヲ約定ス

第四條

兩締盟國ノ一方カ第三圖ト總括的仲裁裁判條約ヲ締結シタル場合ニハ本協約ハ該仲裁裁判條約ノ有效ニ存續スル限右第三圖ト交戦スルノ義務ヲ前記締盟國ニ負ハシムルコトナカルヘシ

第五條

兩締盟國ノ一方カ本協約中ニ規定スル場合ニ際シ他ノ一方ニ兵力的援助ヲ與フヘキ條件及該援助ノ實行方法ハ兩締盟國陸海軍當局者ニ於テ協定スヘク又該當局者ハ相互利害ノ問題ニ關シ相互ニ充分ニ且隔意ナク隨時協議スヘシ

第六條

本協約ハ調印ノ日ヨリ直ニ實施シ十年間效力ヲ有ス
右十年ノ終了ニ至ル十二月前ニ兩締盟國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢棄

スルノ意思ヲ通告セサルトキハ本協約ハ兩締盟國ノ一方カ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一年ノ終了ニ至ル迄引續キ效力ヲ有ス然レトモ若右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方カ現ニ交戦中ナルトキハ本同盟ハ講和ノ成立ニ至ル迄當然繼續スヘシ
右證據トシテ下名ハ各其ノ政府ノ委任ヲ受ケ本協約ニ署名調印ス

千九百十一年七月十三日倫敦ニ於テ本書ニ通ヲ作ル

大不列顛國駐劄日本帝國 加藤 高明
皇帝陛下ノ特命全權大使

大不列顛國皇帝陛下ノ特命全權大使 イー、グレー

B-0033

0349

第二 日露協商

(一) 概 説

日露戦後ノ國際情勢ハ、主トシテ米獨勢力ノ亞細亞侵入ニ對抗スル必要上、日露協商ノ成立ヲ兩國政府ニ取り甚タ願ハシキモノトナシタルモ、露國國內輿論ハ日露提携ヲ喜ハス、爲ニ協商交渉ハ容易ニ其ノ進捗ヲ見サリキ。然ルニ英露協商ノ商議ノ漸次的好轉ニ伴ヒ日露交渉モ英佛ノ斡旋ニ依リ漸クニシテ促進セシメラレタリ。斯クテ日佛協商成立後其ノ影響下ニ急速ニ日露協商ノ成立ヲ見ルニ至レリ。該條約ノ終期ニ付テハ、何等ノ規定存セサリシモ、「ハリマン」ノ滿鐵日米共同管理案ニ由來スル米國國務卿「ノックス」ノ滿鐵中立案提唱ヲ契機トシ、右ニ共通ノ危險ヲ感シタル日露兩國ハ明治四十四年第二回日露協商ヲ成立セシメ、米國勢力ノ滿洲侵入ヲ排除セリ。一九一一年英米獨佛ト支那トノ間ニ成立セル幣制改革借款ハ右四國ヲシテ支那ノ産業的獨占權ヲ取得セシメントシタルモノニシテ之ニ對シ共通

ノ危險ヲ感シタル日露兩國ヲ接近セシメタリ。斯クテ右四國ニ日露ヲ加ヘタル改造借款成立ニ當リ蒙古ニ於ケル勢力範圍劃定ノ爲第三回日露協商ノ成立ヲ見、露國ハ外蒙ヲ日本ハ内蒙ヲ其ノ特殊利益ヲ有スル地トシテ相互ニ承認シタリ。世界大戰勃發スルヤ、其ノ勝利ニシテ何レノ側ニ歸スルモ日英同盟ト並ヒテ日露同盟ノ存スルコトハ帝國ニ取り有利ナリト思考セラレ第四回日露協商ノ成立ヲ見ルニ至レリ。該條約ニ依リ、兩國ハ單獨ニ獨塊ト講和セサルコト及兩國カ滿蒙ニ有スル特殊利益ノ侵犯者ニ對シ共同防衛ヲナスヘキコトヲ規定セリ。而シテ侵犯者トハ何國トモ明示セラレサルヲ以テ單獨逸ノミナラス、米國モ亦該侵犯者タリ得ル點ハ注目ヲ要スル點ナリ。該條約ト共ニ附屬協定成立ノ噂アリシモ露國ノ革命勃發ノ爲、實現ヲ見ルニ至ラサリキ。一九一七年露國國內ノ革命ニ依リ「ソヴイエト」政府ノ成立シタル後、帝國政府ハ新「ソヴイエト」政府及帝國政府間ノ爾今ノ關係ヲ

律スル規本規則確立ノ爲北京ニ於テ所謂基本條約ヲ締結シタリ。該條約第二條ノ規定ニ基キ「ポーツマス」條約以外ノ日露間ノ條約、協約、協定ハ追テ開カルヘキ會議ニ於テ審査セラルヘキ旨規定セラレタリ。而シテ斯カル會議ハ開催セラルル氣運無之ヲ以テ如上四箇ノ日露協約ハ事實上廢棄セラレタルモノト考フヘシ。之日露協商ヲ第二編ニ記スル所以ナリ。

(二) 條約文

一 第一回日露協約

明治四十七年七月三十日聖彼得堡ニ於テ調印（佛文）
同 年八月十五日官 報 掲 載

日本國皇帝陛下ノ政府及全露西亞國皇帝陛下ノ政府（幸ニ日本國及露西亞國間ニ克復セラレタル平和及善隣ノ關係ヲ鞏固ナラシムコトヲ希望シ且將來兩帝國ノ關係ニ於ケル一切誤解ノ原因ヲ除去セムコトヲ欲シ左ノ條款ヲ協定セリ

第一條

締約國ノ一方（他ノ一方ノ現在ニ於ケル領土保全ヲ尊重スルコトヲ約ス又締約國間ニ贈本ヲ交換セル締約國ト清國トノ現行諸條約及契約ヨリ生スル一切ノ權利（但シ機會均等主義ニ反セサル權利ニ限ル）竝一千九百零五年九月五日即露曆八月二十三日「ポーツマス」ニ於テ調印セラレタル條約及日本國ト露西亞國トノ間ニ締結セラレタル諸特殊條約ヨリ生スル一切ノ權利ハ互ニ之ヲ尊重スルコトヲ約ス

第二條

兩締約國ハ清帝國ノ獨立及領土保全並同國ニ於ケル列國商工業ノ機會均等主義ヲ承認シ且自國ノ執リ得ヘキ一切ノ平和的手段ニ依リ現狀ノ存續及前記主義ノ確立ヲ擁護支持スルコトヲ約ス
右證據トシテ下名ハ各其ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ之ヲ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月三十日即露曆一千九百零七年七月十七日（七月三十日）聖彼得堡ニ於テ本書ヲ作ル

本野 一郎
イズヴォルスキー

二、第一回日露祕密協約

全露西亞國皇帝陛下ノ政府及日本皇帝陛下ノ政府ハ滿洲、韓國及蒙古ニ關シ一切紛争又ハ誤解ノ原因ヲ除去セムコトヲ欲シ左ノ條款ヲ協定セリ。

第一條 日本國ハ滿洲ニ於ケル政治上及經濟上ノ利益及活動ノ集注スル自然ノ趨勢ニ願ミ且ツ競争ノ結果トシテ生ズルコトアルベキ紛議ヲ避ケンコトヲ希望シ、本協約追加約款ニ定メタル分界線以北ノ滿洲ニ於テ、自國ノ爲又ハ自國臣民若ハ其ノ他ノ爲、何等鐵道又ハ電信ニ關スル權利ノ讓與ヲ求メズ、又同地域ニ於テ露西亞國政府ノ支持スル該權利讓與ノ請求ヲ直接間接共ニ妨礙セザルコトヲ約ス。露西亞國ハ亦同一ノ平和的旨意ニ基キ、前記外界線以南ノ滿洲ニ於テ、自國ノ爲又ハ自國臣民若ハ其ノ他ノ爲何等鐵道又ハ電信ニ關スル權利ノ讓與ヲ求メズ、又同地域ニ於テ日本國政府ノ支持スル該權利讓與ノ請求ヲ直接間接共ニ妨礙セザルコトヲ

B-0033

0352

約ス。

第二條 露西亞國ハ日本國ト韓國トノ間ニ於テ現行諸條約及協約ハ日本國政府ヨリ露西亞國政府ニ其ノ原本ヲ交付セルモノニ基キ存在スル政治上利害共通ノ關係ヲ承認シ、該關係ノ益々發展ヲ來スニ當リ、之ヲ妨礙シ又ハ之ニ干涉セザルコトヲ約ス。又日本國ハ韓國ニ於テ露西亞國ノ政府、領事館、臣民、商業、工業及航海業ニ對シ、特ニ之ニ關スル條約ノ締結セララル迄一切最惠國待遇ヲ與フルコトヲ約ス。

第三條 日本帝國政府ハ外蒙古ニ於ケル露西亞國ノ特殊利益ヲ承認シ、該利益ヲ損傷スベキ何等ノ干涉ヲ爲サザルコトヲ約ス。

第四條 本協約ハ兩締約國ニ於テ嚴ニ祕密ニ付スベシ。

右證據トシテ下名ハ各其ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ之ニ記名調印スルモノナリ。

明治四十年七月三十日即曆曆一九〇七年七月十七日聖彼得堡ニ於

テ本書ヲ作ル。

本 野 一 郎
イ ズ ヲ ル ス 寺
④ ④

B-0033

0353

追加約款

本協約第一條ニ掲ゲタル北滿洲及南滿洲ノ分界線ハ左ノ如ク之ヲ定ム。同分界線ハ露韓國境ノ北西端ニ始マリ、琿春及必爾勝湖北端ヲ經テ秀水站ニ至ル迄逐次直線ヲ劃シ、秀水站ヨリハ松花江ニ沿ヒ嫩江ノ河口ニ至リ、之ヨリ嫩江ノ水路ヲ溯リテ托羅河ノ河口ニ達シ、此地點ヨリ托羅河ノ水路ニ沿ヒ、同河トダリニツテ東經百二十二度トノ交叉點ニ至ル。

本野 一郎
イヌヴオルスキー

四 第二回日露協約

明治四十三年七月 四日 聖彼得堡ニ於テ調印 (佛文)
同 年同月十三日 官報 掲載

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ千九百七年七月三十日即チ露曆十七日ヲ以テ締結シタル協約ノ定ムル主義ヲ誠實ニ保持シ且極東ニ於ケル平和ノ確保ノ爲該協約ノ效果ヲ擴張セムコトヲ希望シ左ノ條款ヲ以テ該協約ヲ補成スルコトヲ協定セリ

第一條

兩締約國ハ列國ノ交通ヲ便易ナラシメ其ノ商業ヲ發達セシムル目的ニ依リ滿洲ニ於ケル各自鐵道ノ改善及該鐵道ノ聯絡業務整備ノ爲相互ニ友好的協力ヲ與フルコト並此ノ目的ノ遂行ニ有害ナル一切ノ競争ヲ爲ササルコトヲ約ス

第二條

兩締約國ハ孰レモ今日ニ至ル迄日本國ト露西亞國トノ間又ハ兩國ト

B-0033

0354

清國トノ間ニ締結セラレタル一切ノ條約又ハ其ノ他ノ約定ニ基ク滿洲ノ現狀ヲ維持尊重スルコトヲ約ス
前記諸約定ノ廢本ハ日本國ト露西亞國トノ間ニ交換ヲ了セリ

第三條

前記現狀ヲ侵迫スヘキ性質ノ何等事件發生スルコトアルトキハ兩締約國ハ該現狀ヲ維持スルニ必要ト認ムル措置ニ付協定セムカ爲相互ニ隨時商議ヲ爲スヘシ
右證據トシテ下名ハ各其ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十三年七月四日即チ露曆千九百十年六月二十一日(七月四日)聖彼得堡ニ於テ本書ヲ作ル

本野 一郎
イズヴォルスキ

第二回秘密協約

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ千九百七年七月三十日即チ露曆十七日「ベテルスブルグ」ニ於テ調印シタル秘密協約ノ約款ヲ確實ニシ且之ヲ擴張セム事ヲ希望シ、左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 日本國及露西亞國ハ千九百七年ノ秘密協約追加約款ニ定メタル分界線ヲ以テ滿洲ニ於ケル兩國特殊利益ノ各地域ヲ劃定セルモノトシテ之ヲ承認ス

第二條 兩締約國ハ前記地域内ニ於ケル其ノ特殊利益ヲ相互ニ尊重スルコトヲ約ス從テ兩締約國ハ各自ガ其地域内ニ於テ該利益ヲ擁護防衛スルニ必要ナル一切ノ措置ヲ自由ニ執ルノ權利ヲ相互ニ承認ス

第三條 兩締約國ハ孰レモ前記地域ノ限界内ニ於テ他ノ一方ノ特殊利益ガ將來益々確保増進セラルル場合ニ何等之ヲ防礙セザルベキコトヲ約ス

B-0033

0355

第四條 兩締約國ハ孰レモ滿洲ニ於ケル他ノ一方ノ特殊利益ノ地域内ニ於テ何等政治上ノ活動ヲ爲ササルコトヲ約ス且日本國ハ露西亞地域内ニ於テ又露西亞國ハ日本地域内ニ於テ孰レモ他ノ一方ノ特殊利益ヲ害スベキ性質ノ何等特殊權又ハ利權ヲ求メザルベク又日本國政府及露西亞國政府ハ孰レモ他ノ一方ガ其ノ地域内ニ於テ本日調印ノ公表協約第二條ニ掲グル條約又ハ其ノ他ノ約定ニ依リ獲得セル一切ノ權利ヲ尊重スベキモノトス

第五條 兩締約國ハ其ノ相互的約定ノ圓滿ナル實行ヲ期センガ爲滿洲ニ於ケル各自ノ特殊利益ニ共通ノ關係アル一切ノ事項ニ付隔意ナク且誠實ニ隨時商議ヲ行フベシ

前記特殊利益ガ侵迫セララルコトアルトキハ兩締約國ハ該利益ノ擁護防衛ノ爲共同ノ行動ヲ爲シ又ハ相互ニ援助ヲ與フルノ目的ヲ以テ孰ルベキ措置ニ付協議スベシ

第六條 本協約ハ兩締約國ニ於テ嚴ニ祕密ニ付スベシ

右證據トシテ下名ハ各自ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十三年七月四日即チ露曆千九百十年六月二十一日（七月四日）ペテルブルグニ於テ本書ヲ作ル

本 野 一 郎

イズヴォルスキ

B-0033

0356

六 第三回日露秘密協約

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ一九〇七年七月三十日（露曆七月十七日）及一九一〇年七月四日（露曆六月二一日）兩國政府間ニ締結セラレタル秘密協約ノ條項ヲ確定補強シ以テ滿洲及蒙古ニ於ケル各自ノ特殊利益ニ關シ誤解ノ原因ヲ總テ排除セムコトヲ希望シ之ガ爲前記一九〇七年七月三十日（露曆七月十七日）ノ協約ノ追加條款ニ定メタル分界線ヲ延長シ且內蒙古ニ於ケル各自ノ特殊利益地域ヲ定ムルコトニ決シ左ノ條項ヲ協定ス。

第一條 前記分界線ハ托羅河ト「グリニツチ」東經一二二度トノ交又點ヨリ出テ「ウルンチユルン」河及「ムシシヤ」河ノ流ニ依リ「ムシシヤ」河ト「ハルダイター」河トノ分水線ニ至リ、是ヨリ黑龍江省ト內蒙古トノ境界線ニ依リ內外蒙古境界線ノ終端ニ達ス
第二條 內蒙古ハ北京ノ經度「グリニツチ」東經一一六度二七分ヲ以テ之ヲ東西ノ二部ニ分割ス

日本帝國政府ハ前記經度ヨリ西方ノ內蒙古ニ於ケル露西亞國ノ特殊利益ヲ承認シ且之ヲ尊重スルコトヲ約ス露西亞帝國政府ハ該經度ヨリ東方ノ內蒙古ニ於ケル日本國ノ特殊利益ヲ承認シ且之ヲ尊重スルコトヲ約ス

第三條 本協約ハ兩締約國ニ於テ嚴ニ秘密ニ付スヘシ
右證據トシテ下名ハ本件ニ付各其政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本協定ニ署名調印ス

明治四五年七月八日即一九一二年七月八日（露曆六月二五日）
「サン、ペテルスブルグ」ニ於テ本書ヲ作ル

本 野 一 郎

サ ゾ ノ フ